
龍魂の破片【リュウコンノカケラ】

飛唯恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍魂の破片【リュウコンノカケラ】

【Nコード】

N1919T

【作者名】

飛唯恭

【あらすじ】

闇に浮かんだ白い光。

時が重なり、引き寄せられた二人。

魂の半身を求める龍。

その龍と幼い日に出会った娘。

再び巡り逢った二人の運命は？

【自サイト転載作品です】

序章？

最初の出会いは遙か昔。

一族から伝え聞いた
愛しい僕の半身。

僕の魂はこの世界へと
再び器を得、

彼女の魂は人の世へと
生まれ変わる。

小さな僕が訳も分からぬ切なさに涙を零す夜。
優しく僕を宥める昔話。

母は、柔らかな掌で僕の頭を撫で、
瞼をゆっくり閉じるまで語って
くれた

『魂に刻まれた愛しい者を呼んでいるのね…

新たな器を持った二人が巡り合うのは、まだ、私にも判らない事。

時が巡るのを待つしかないわ…

でもね、貴方のその想いが消えないならば、きっと逢える筈よ。』

涙が乾いた頬を、母に擦り付け、眠りに付いたのを時折想い出す。

静かな月夜…

さわさわとざわめく

樹々の音。

こんな夜には、我知らず零れ落ちる涙。

煌々と光る眩い満月を見上げ、僕の魂はまだ見ぬ愛しい人を呼んでいる…

?



摩南は、いつもの様に仕事を終え帰宅していた。

残業で、思いがけない時間まで会社に残った彼女は、冴え渡る夜空を見上げながらゆっくりと家路を辿る。

「はあっ、集中し過ぎて疲れちゃった。
ま、一区切り付いて代休くれたしね。」

：それにしても綺麗な月
なんだか、癒されるなあ

ぽおっと空を見上げ、立ち止まる。

「本当、私って昔から月眺めるの好きだよね。
綺麗過ぎて、涙が出ちゃう時も有る位：
不思議だよね。」

マンション脇の公園の
大きな樹々。

街灯が照らす公園の上には、ぽっかりと丸い月が浮かんでいた。

ふと視界に入る、見慣れぬ光。

樹々の間、公園奥にゆらゆらと立上ぼる淡い光に摩南は目を止めた。

「誰かライトでも持ってるのかな？」

深夜の訝しげな明かりに少し身構えながら、摩南はじっと明かりを見つめる。

小さな光は公園奥から近付き、人影など無いまま宙に浮かんでいた。

びくつと摩南は身体を強張らせ、その場に立ち尽くした。

…あれって、人魂とか鬼火とか呼ばれる物…じゃないの？

なぜか、怖さなどは無く逃げようとも思えなかった。

摩南の瞳は引き寄せられる様に、その光を見つめ続ける。

光は徐々に大きさを増しその中に影を写し出し始めている。

僅かの時間の間に、それは淡い光を纏う背の高い人影となり、真っ直ぐに摩南の元を指指して歩いていった。

「誰…？何なの…？」

戸惑いの言葉が、口から零れ落ちる。

彼女よりも遥かに長身の男の姿。

輝きの中から、ずっと手が差し延べられた。

「僕との時が重なった…

申し訳無いが、夢を見たと思って、僕と一夜過ごして頂きます…」

眩さに目が慣れず、男の顔さえも分からない。

摩南に判るのは、差し出された細く長い指先と、着物の袖口ぐらいなものだった。

「ちょ…つと…

えっ？ 一体な…に…」

言葉の途中で摩南は、光の中へとぐいっと腕を掴まれた。と同時に、彼女の身体は細身だが逞しい胸へと包まれる。

耳元で、彼の優しく囁く声が聞こえた。

「今宵一夜が過ぎれば、こちらの世界に戻れます
御安心を…」

緩やかに身体の力は抜け落ち、意識がまどろみへと誘われる。

彼の唇が、耳元から頬を掠め、摩南の唇へと重ねられた。

「んっ…あっ…」

突然の事に、息を漏らす摩南。

そつと唇を離された後に彼女はまどろみの中、問い掛ける。

「…本当に…誰？」

何者………な………の？」

「……説明しても、理解して頂けるかどうか。

せめて、名だけでも……。

蓮…と、御呼び下さい。」

「レ……ン？……」

「そう……

しばしの間、眠って下さい……話は後で……」

摩南は、その言葉を聞きすうと意識を手放した。

何処か物憂げな表情で摩南の顔を見つめ、蓮は片手を空へと掲げる。

掌から一瞬強い光が放たれると、身体を包んでいた淡い光はすぐに闇へと融けてゆく。

二人の姿は、あっという間に影も形も無くなった

深夜の公園は静けさを取り戻し、普段と変わらぬ風景となる。

通りすがりの者も気付かぬ、一瞬の出来事。

満月の下、何事も無かったかの様に、樹々のざわめきだけが響き渡っていた……

?



寢所に横たわる彼女を眺める蓮の姿。

白い着物に浅葱の袴を纏う彼は、彼女の目覚めを戸惑いながらも心待ちにしていた。

銀色とも見紛う白い髪を掻き揚げながら、時折そつと摩南の頬に指先を伸ばし、優しく触れる。

「忘れたりしない…

間違えるもんか…

君は…摩南だろう?」

眠る彼女に向かい呟く蓮

幼い頃、偶然出会った女の子。

夏休みで、母の田舎へ遊びに来てるのだと言った

遊び慣れた裏の里山に、一人分け入った時、僕らは偶然出会った。

小さな赤い鳥居が幾つも並ぶ、小さな祠と手入れされた社。

そして、脇には龍神を奉る泉。

僕の住む世界。

それは、この世とは次元が違う世界。

自然の力を操る、様々な能力を持つ者が集う。

人間達が、神と呼び崇め奉る種族もいれば、その力と姿形に畏怖を抱く種族もいる。

僕の一族は、摩南の田舎の土地神として奉られた、水を守護する者達。

龍神と呼ばれる者。

そんな話を彼女に言える訳などなく、僕は彼女の手を引き川遊びへと誘う

里山の脇に流れる小川で、水飛沫を上げはしゃぐ摩南におずおずと僕は言った。

「僕のおばあちゃんの家は、山の向こうなんだ。でもね、引っ越すかもしれないから、いつ此所に来れるかも分かんなくて…」

「そっか…」

つまらないなあ。

会ったばかりなのに」

「あつ、な、名前なんて言うか聞いてもいい？」

「うん。いいよ！」

まな。摩南って言うの」

無邪気に微笑んで、名前を覚えてくれた摩南。

「僕は…れん！蓮って言うんだ！」

名前を呼び合い、川で過ごす時間はあつと言う間だった。

夕方、熱い陽射が弱まった頃に僕はふと身体に異変を感じた。

水に漬かる足元に目をやると、ぽわりと淡い光が揺らめいていた。

次元を超える時に包まれる光が、自分の意思とは別に身体を包もうとしている。

…このままじゃあ、摩南のいる前で突然消える！

「ごめん！摩南！」

僕…帰るから…」

慌てて岸に上がり、僕は里山の樹々の間へと走り出した。

「えっ！？れ、蓮…？」

驚き、僕の名前を呼ぶ彼女を振り返りもせず、僕は山へと姿を消した。

いや、走る途中で、自分が住む世界に引き戻されたと言った方が正しい。

木立ちに差し掛かった時には白い光に全身が包まれ、気が付くと、一族が住む社に戻っていたのだから。

「なんで…突然…」

不思議に思いながらも、摩南の目の前じゃなくてホッとしていた僕。

「また…逢えるかな？」

その呟きと同時に、僕の意識はゆっくりと途切れた。

次に目を開けたのは、見慣れた自分の部屋。

傍らに座る母が、僕の顔を覗いて静かに微笑んだ

「僕どうしたの？」

柔らかな手が、僕の髪を撫でた。

「驚いたでしょう？」

でもね、喜ばしい事なの

貴方の身体は、成人する為の準備を整え始めたのよ。
その為に、こちらへ、
この社へと引き寄せられたの。」

思いがけない母の言葉に僕は喜びで胸が一杯になった。

「じゃあ、父様や皆みたいにな、色んな場所に自分で行けるんだね！」

…あの場所じゃなくても摩南に逢える！

幼い僕は、社を含むこの土地でしか、人の世へ行けなかったのだ。

…成人となれば、能力は増し他の地にも跳べる。

単純に喜んでゐる僕に向かい、母が言ったのは意外な言葉だった。

「蓮…貴方の身体は、普通の龍体とは少し違うの

皆は徐々に身体が成長するけれど、貴方の身体は一度眠りに着かなければならない。」

その時、スッと寝所の紗の薄布が開かれた。

「父様…」

「他の幼い龍体に、会わずに育てたのはその為

理由を知ってても、どこかで引け目を感じて欲しく無かったからだ。」

深い蒼の瞳と、漆黒の長い髪を後ろで束ね、長身のしなやかな身体を持つ父が、母の隣りに腰を下ろす。

「一族の中に、時折現れるのだよ。」

だが、幼い姿が長く続く分、成体となった時の能力は他の者よりも強い。

目覚めれば、それを実感出来るだろう。」

二人は、顔を見交わせ嬉しげに微笑み合った。

嬉しさのあまり、蓮は起き上がろうとしたが、なぜか四肢に力が入らない

不思議に思っている蓮に父が言った。

「もう、変化が始まっているのだ。」

まあ、冬眠の様なものと気楽に考えておくと良い

後もう一つ：

お前は、人の精を取り込まなくてはならない。

これは、また目覚めてから話をした方法が良いだろう。

幼いお前には……まだ、どういう意味なのか解らぬだろうからな……。」

「人の…精？」

きょんとした瞳の僕に、二人は苦笑した。

「さあ、今は眠りに着くのが先よ。」

目覚めた時、自分で驚かない様に心積もりしておくの良いわ。」

こくりと頷く僕の額に、父の掌が当てられた。

温かな光に包まれ、再び僕はまどろんでゆく。

大人になれる喜び。

そして、無邪気に遊んだ摩南を思い出しながら…

「眠ったか…」

「ええ。目覚めたらびっくりするでしょうね。」

いきなり大人の身体に成長してるのですもの。」

龍の長は額から手を離し、傍らの妻へと顔を向けた

「しかも、いきなり人の精を必要とするのだ…

普通ならば、成長するに自然に気付く男女の営み。

それを、強引に手ほどきを受け見知らぬ者と交わるのだ。

…………戸惑うだろうよ。」

「同じ龍と番いになろうとも、一年に一度は人と精を交わさねばならないと言うじゃないですか。

ましてや、この子は、遙か昔の想いを魂に刻んでいるのに…」

切なげな表情が、母の面に浮かんでいた。

「番いに巡り合うか判らぬまま精を交わす為だけに、人の身体を抱かなければならないからな
だが、多才な能力を維持する為には必要だと伝えられている。

一番良いのは、人間に転生した魂と出会える事だが…」

微かな溜め息が、父の口から漏れた。

「一族の誉れとも伝えられる番いの魂ですもの。

必ず巡り合う筈ですよ…

…彼女の魂に。」

二人は、互いの顔を見て軽く頷いた。

?

彼女を眺めながら、特異な僕の運命を思い返す。

「摩…南…」

小さな声で、彼女の名前を口に出す。

あの日から、呼ぶ事の無かった彼女の名前。

蓮は、肩先まで有る彼女黒髪を指先でゆっくりと梳きながら、温かな想いが心に溢れるのを感じていた。

その反面、この空間に彼女を連れ去った意味に思い悩む。

人との精を交える事が、自分の能力を高め持続する。

波長が引き合う者と時が重なると、その磁力に導かれ次元を移動出来る。

己の選択の余地など無い。

長い眠りから覚め、身体は成長したが、心は幼いまま。

訳が解らぬままに、同世代の龍との顔見せと、特異な龍体について

纏わる話を語られる。

そして、人間の精を受ける意味について唐突に教えられた。

あれから何年も経つが、誰かを抱いていても、一人になれば虚しさが残るだけだった。

ましてや、勝手な理由で一夜を過ごす人相手ならば尚更の事だ。

人は、この空間から出れば記憶も臍になり、時間の流れも違う為、うたた寝でまどろんだ程度の感覚だけだろう。

だからこそ、蓮は今までの相手に対しては優しく扱いながらも、短い時間でやり過ごして来たのだ

催眠を掛け、夢うつつの相手に自分を覚えていて欲しいとも考えはしなかった。

昔から、己の魂の破片を探し、夜空を見上げ涙を零していた僕

その番いに出会うまでは、自分の心は揺れ動く事など無いと思っていた。

だが、摩南を目の前にして、蓮のその想いは崩れそうだ。

安らかな息を漏らす色付いた唇。

滑らかさを、触れずとも感じさせる柔らかな肌。

成熟した、しなやかなその肢体から目が離せない。
幼き頃だとは言え、想いを残す相手を、目の前にした蓮の気持ちを揺さぶるには、充分な状況だった。

それを相乗するのは、身体の奥底で沸き立つ欲。

能力保持の為とは言えど時期が巡る時に、じわりと滲む欲情のほてり。

蓮が、その欲をこれ程リアルに感じたのは、初めてだったかもしれない。

「う…う…ん…」

息を漏らし、寝返りを打つ彼女の声に、はっとし指先を離そうとするが、吸い込まれる様に指先が離れない。

「いっそ、目が覚めぬまま、摩南の寝顔を眺めているだけの方が楽なのか…?」

切なげな顔をした蓮の口から、そんな言葉が零れ落ちた。

薄布の紗に包まれた寝所の外は漆黒の闇。

日常から切り離され、閉じられた空間の中、龍の一族の青年は突然の再会に戸惑う。

懐かしい面影を残す彼女の顔を覗き込み、ゆっくりと蓮の顔が摩南

へと寄せられた。

雪の様に真白な前髪が、さらりと目元に被り、柔らかな毛先が摩南の額を撫でる。

静かに：

ゆっくりと：

蓮の唇は、摩南の唇へと重なった：

ふっくらと柔らかな唇の温もりに、思わず甘い吐息が漏れた。

摩南を起さぬ様に、そつと何度もその温もりを啄む蓮。

緩やかに時間が流れる結界の中再会の夜が始まる……

一章・龍の血【瞳に写る懐かしき顔】

まどろみの中、摩南は優しく囁く声に落ち着きを感じる自分を不思議に思っている。

…あれは誰だったの？…

淡い光の中で私を引き寄せた人影は？

眩さに邪魔され、はっきりと顔は判らなかった。

だけど、記憶のどこかにひっかかる。

銀にも見紛う白い髪。

……ああ…

摩南は、ふと思い出す。

幼い日、僅かの時間を過ごした男の子。

川遊びの途中、突然慌て出し山へと走り去ったあの子。

…ああ、そうだ。

あの男の子の顔立ちに似てるのかもしれない。

あの子の名前も『蓮』だったよね。

年を聞いて無かったけど多分二つか三つ位年上。
突然現れたあの人も、その位に見えた…

『摩…南…』

なんで、そんなに切ない声で私を呼ぶの？

ねえ…教えて？

貴方は、あの時の男の子なの？

身体から力が抜けてる…

意識も、ふわふわと空にでも漂ってるみたい。

不思議な感覚だね…

何でだろう？

怖くなんかない。

懐かしくて堪らないの…

それに、なんて清々しい場所なんだろう。

清らかな空気に癒されてる…

ふと、頭の片隅で考えたのは、事故にでも巻き込まれ、意識が彷徨ってるのかもしれないと言う事だった。

でも…これが只の夢だとしても気持ち良い…

そんな無邪気な考えに、摩南は我知らず笑みを浮かべていた。

物憂げな溜め息を幾度が吐いた後、蓮は摩南の目を覚ます覚悟を決めた。

軽い催眠状態のまま横たわる彼女を眺めている方が、自分を抑え切れないだろうと思ったからだ。

互いに会話を交わし、この不思議な展開の説明なり、昔話を語れば、場をやり過ごせるかもしれない：

そして、これは夢なのだと元居た場所へ送り届ければ良い。

そんな風に考え始めていたからだ。

これを逃しても、人からの精を受ける機会は、近い内に再び巡る筈。

蓮が、この行為から逃げるのは最初の夜以来の事だった。

「何年かに一度の我が儘だ：

上手く説明して、誤魔化せば良いだろう。

いや、むしろ僕達の土地に連なる者と知り躊躇したと、はっきり言えれば良いんだ：

そう呟くと、彼の両手は摩南の頭を包む。

ふわりと淡い碧の光が、まるで霞の様に、摩南の頭を包み込んだ。

辺りに拡散し、すぐに消える碧の光。

霞が徐々に消える中、閉じられていた摩南の瞼がうつすらと開き始めた。

そつと手を離し、蓮は摩南の目覚めを見守る。

蓮の瞳は、感情や力の発動により、深い蒼から鮮明な碧色まで水の流れの如く色を変える。

ゆらりゆらりと、微妙に色を変化させる瞳。

冷静さを取り繕おうとしても、隠し切れない動揺を映し出している。

幸い、摩南はそれを知る訳も無い。

それが、彼の救いだった

「普段ならば、瞳の変化を隠す事も容易な自分が、ここまで動揺するとはな…

たった一度の出会いなのに、そんなに彼女に嫌われたくないのか…
僕は。」

蓮の独り言が終ると同時に、摩南の腕が微かに動く。

「…うう…ん、っん…」

視点の定まらぬまなざしを宙に向け、摩南は覚醒した。

脇に座る蓮は、言葉ないまま彼女の反応を待っている。

…摩南は、僕の事など忘れているだろうよ。

自暴自棄な寂しさが、彼の胸を横切った。

漂う闇の中、摩南は小さな光を見つける。

柔らかな碧色のその光は、すぐに視界を覆い尽くし、眠りの闇を退けた。

蓮の掌から、揺らめいていたと同じ光に導かれ目覚めると、摩南はぼおっとしたまま辺りに瞳を巡らせる。

薄闇の中に、うつすらと浮かび上がる、白く輝く髪が、彼女の目の端に映った。

彼女は、ぼやけたまなざしをはっきりさせようと、パチパチと瞼を瞬かせ、目元を手で擦る。

そして、目覚めてから始めて、蓮は彼女に向け言葉を発した。

「術は解けた…」

すぐに意識もはっきりして、身体も楽になります。

安心していい…」

その言葉を発する者の顔に、摩南の瞳の焦点が、徐々に定まってゆ

く。

：碧にも蒼にも見える瞳。

綺麗：

蓮の言葉通り、四肢に力が戻るのを感じると、摩南は手を付き上体を起した。

「夢を見てるの？：私。

ううん、それでも構わない。

だから：

一体何が起こったのか、話を聞きたいんだけど…？」

摩南は動揺した様子も無く、蓮を見つめゆっくりと問い掛けた

涼やかな切れ長の眼。

ゆらゆら煌めく瞳が、伶俐さに艶を添える。

スツと鼻筋が通り、少し薄目の唇には切なげな笑み。

まるで、名工に上等な細工を施されたかの様な、整ったその面

摩南は、ちらりと、部屋の様子に目を走らせる。

古式ゆかしい寝所など見るのは初めての摩南。

幾ら、贅を凝らした昔ながらの日本家屋だろうが、現代ならばこの様なしつらえにはするまい

四本の柱と梁を囲むように、幾重にも紗の薄布の幕と、五色の細い布が垂れ、外部の漆黒の闇を遮っている。

そして、広い部屋の中央には、摩南が横たわっている寝台。

枕元から少し離れた場所には、灯の代りなのか柔らかな白色の炎が宙に揺らめく。

「君の名前は…摩南…だろう？昔、僕は君と会った事があるんだ。夏の日君の田舎で」「覚えてるよ。

蓮…でしょう？

裏山の祠で会った男の子。

川で遊んだの覚えてる」

少し驚いたかの様に、冷静さを取り繕った蓮の表情が崩れ、柔らかなものへと変わった。

「覚えていてくれたとは嬉しいよ…摩南。」

摩南は蓮の方に身を乗り出し、真っ直ぐな瞳を彼に向けた。

「ねえ、蓮…

私の意識が途切れる前に貴方が言ったのはどういう意味？

『時が重なった』

『一夜を過ごす』

あれは、一晩この夢を見れば元に戻るって事なの？」

「ああ、一晚経てばちゃんと戻れる。
心配しなくても大丈夫だ。」

この結界の中では、時の流れも緩い。」

安心した顔で、摩南はふうっと息を吐く。

「じゃあ、これは、きっと夢を見てるんだね…。
なんだか、気が楽になって良かった…」

「摩南が無邪気なのは、変わらぬままだな。」

くすりと、蓮の口元から笑い声が零れた。

先程までの戸惑いが嘘の様に感じられ、心が軽くなる。

蓮は、脇に置いてあった水差しから、透明な掌ほどの椀に何かを注ぎ、摩南に差し出した。

「これ…」

「害の有る物ではない。あの山奥の湧水だ。」

山の霊力を溢れさせた水だから摩南の身体にも効くだろう。」

ごくりと一口飲み干せば、身体の隅々まで冴え渡る。

仄かに舌と喉に甘さが残るその水は、一瞬にして摩南の身体も心も癒し、解きほぐしてゆく。

「美味しい！」

「自然の気と、僕の霊力が込められた癒しの水。気に入ってくれたか？」

摩南は、頷きながら水を飲み干し、ことりと椀を床に置く。

「蓮の霊力って…何？」

「一体、蓮は何者なの？」

蓮は、すうっと息を整え片手で白い髪を掻き揚げながら、摩南への最初の言葉を探した。

摩南は、静かに彼の言葉を待っている。

「僕の住む世界は、人の世ではない。

つまり、摩南とは違う世界の住人。

あの地で言えば、土地神として奉られた龍神。

…僕は…龍の一族の者。

まあ、信じられなくても仕方無いだろう…な…」

「龍…龍神って？」

確かにあの田舎一体には、龍を奉ってる場所も多いし、山自体が龍神が住まう処なんて話も聞いたけど…」

母の田舎の話进行い出しながら蓮の話への疑問を、素直に口にする
摩南

聞けば聞く程、夢だと思っていながらも、色々な話に気を取られて

しまう

「摩南、考え過ぎる事は無い。只の昔話、夢の中の話だ。」

蓮はそう言くと、摩南の肩を優しく撫で、話を止めた。

「うん…大丈夫。蓮、話を続けて？」

そう…これは、夢の中。

だからこそ、戸惑う事無く、彼を見つめていられるもの。

目覚めた龍の戸惑い

「君の言う通り、あの一帯には僕の眷属が多く居る。

只、僕の身体は特異でね、それを意識させぬようにと、他の幼い龍体と離されて育ったんだ。

幼い時は、自分の宮と、あの社の周りに有る結界内が、僕の遊び場所だった。」

「でも、私小さい頃は、泊まりがけで、何度も田舎に行ってたけど、会ったのは一度だけだよ？」

「幼い僕が、人の目に写るには色んな条件が必要なんだ：

あの夏の日、祭りが近くて、人の世との次元が一番近付いていたから」

ふうんと頷きながら、自分の話を熱心に聞く摩南のまなざしを受け、蓮の心が踊る。

「それに、あの後すぐ、僕は成体になる為に眠りに着いた。

目覚めには数年掛かる」

実は、彼は目覚めてすぐに、出会った場所にも、摩南の祖母の家にも訪れていた。

制約無しに、人界に行ける事に胸を弾ませながら。

しかし、成長した摩南は、幼い頃より訪れる機会も減り、姿を見る事は叶わなかったのだ。

その上、成体となったのを機に龍の眷属との対面に追われ、次元を超える事も減った。

だが、何よりも蓮を戸惑わせたのは、人の精を受ける為の交わりを聞かされた事だった。

龍が操るのは主に水だが火、風地の力を操る者もいる。稀に、全ての能力を操る者が生まれ一族の羨望となる。

眠りの時期を経て、一気に成長し、徐々に様々な能力を開花させる性質を持つ特別な龍。

その開花に必要なのが、人の精気なのだ。

成人し、交わりを知る為あてがわれた年上の眷属の女性。

成長した自らの身体が欲する欲とその反応。

媚薬の効果も有り、それは衝撃だった。

その反面、相手と心を交わす事無く、身体を重ねなければならない事に侘しさを抱いたのも事実だ。

蓮は、時折次元を超えても、人を避ける様になっていた。

一度だけ、遠目に摩南の姿を見た事がある。

亡くなった祖父の法事にやって来た彼女は、十代半ば。

元より、大人びた綺麗な目鼻立ちの彼女。

若々しさの中にも、伏せた目元や表情に、女性としての魅力がほんのり滲む。

後二、三年もすれば一端の女性として、摩南を見る男も増える事だろう。

そして：愛しい男と巡り会い、綺麗な花を咲かすのだろう。

女という存在を意識し過ぎる余り、蓮の心は気後れした。

一族の羨望を受ける蓮の元には眷属の女性が寵愛を受けようと自ら擦り寄る機会も多く、そんな輩に辟易していたのも有る。

無邪気に遊んだ二人の思い出が唯一、心の拠り所となっていた蓮。

美しく花開く予感を感じさせる彼女に、無意識で魅かれ、戸惑う想いにはまだ気付いてはいなかった。

その戸惑いを、女性に対しての億劫な気持ちだと解釈し、時が過ぎたのを実感する。

「眠る事無く、普通に成長してたら、もっと一緒に摩南と過ごせただろうな…」

蓮が、そんな独り言を呟いている時、偶然、摩南が顔を向けた

周りにいる人達との会話に、軽く笑みを浮かべた表情は昔とは違い、大人の落ち着きさえ見えた。

…僕だけじゃなく、摩南も変わっただろうか？

彼の碧の瞳は、気付かぬ内にゆらゆらと揺らめき、深く水を湛えた蒼色へと変わっていた。

蓮は、掌を宙に向け次元の扉を開き、摩南を一瞥すると身を翻し、中へと消えた。
振り向く事無く……

「れ…ん…蓮、どうしたの？」

はっと気付けば、摩南が蓮の顔を覗き込み、名を呼んでいた。

「あ、ああ、ごめん。」

…昔の事を思い出してた

摩南は、もう違う土地に住んでいるんだね。
今でも、あの場所に行く事は有るのかい？」

摩南は小さく首を振り、

「私が地元から出た後、おばあちゃんも亡くなったの。
学生の時程、地元にも帰れないし、親が別れてからは、実家も無くなったから…最近、何年も帰ってないよ。」

「そうなのか…」

摩南は手を伸ばし、蓮の袖口をそっと指先で掴んだ。

「蓮の話、もっと聞かせて？龍と話せるなんて、夢でもなかなか無いでしょう？」

蓮は、彼女の指先の動きにどきりとする。

動きと共に、仄かに薫る彼女の香水が蓮の鼻先を掠める。

彼の着物の袖口を握ったまま、彼女は言った。

「あのね、小さい時に田舎で過ごした日は、私にとってすごく幸せな思い出なの。」

大人になって良く判ったよ。

未だに、昔に戻ってあの場所に帰りたいなんて思う事もある位にね…

だから…この夢で、蓮に遭えて嬉しいよ…」

「嬉しい…？」

「うん。最初は驚いたけどね。でもね、昔遊んだ蓮なら、この不思議な夢も楽しめそうなの。」

その摩南の言葉は、蓮に喜びを与えた。

…夢だと信じてくれるなら、一族の者にも言えなかった想いを摩南になら話せるかもしれない

そんな想いが、蓮の頭の片隅に過ぎった。

袖口にある摩南の手を、ゆっくりと握り締める彼の手。

「摩南は軽蔑するかもしれない…それでも、僕の話聞いてくれるかい？」

もし、途中で嫌になったら、帰りたいたって来て構わないから。
」

蓮の真摯な瞳を見て、摩南は少し驚いた。

…丁寧な物腰、冷静な口調は徐々にほぐれて、今の蓮の瞳は縋る様に私を見つめてる。

「良いよ…話して…」蓮の顔が微かに綻んだ。
二人は手をそっと離し、膝に戻す。

宵闇の結界

「摩南も、もう大人だ。
好きな者と、体を重ねる事もあるから判るだろう…。

この空間はね、僕が人から精を受ける為に張られた結界。
今日：摩南に出会ったのは、此処で君を抱く為だった…」

「私を…？」

「僕の身体は、一年に一度波長の合う人間の魂と出会い、身体を重ね交わる事で、潜在能力が目覚めてゆく。

自分自身は望まなくとも、一族にとっては、数百年待ち望んだ特別な龍体。

我が儘は許されない。」

蓮は、瞳に緊張の色を浮かべた彼女を見て、ふっと切なげな微笑みを浮かべた。

「安心して、摩南。

僕に、そのつもりは無いよ。

この機会を逃しても、事が成就しなければ、近い内に又、時が重なる日が来る。」

相手には、とても失礼な言い方だけれどね……。」「

「蓮には、恋人…とか好きな人はいないの？
もし、そんな相手がいれば、二人共耐えられないって思う。幾ら一族の為でも…」

摩南の口調が僅かに強まった。

「今は…いない。」

昔この場から…一度だけ逃げた事もある。
最初の時だ。

夢うつつの相手を残してね。

だが、結界を飛び出した途端、術を施され押し戻された。」

苦笑いを浮かべ蓮は語り続ける

「混濁した意識の中、欲情だけを解放され、正気に戻った時には夜が明けていた。

あんな後味の悪さは、もう二度と御免だ！…」

「そんなに、蓮の力は大切な物なの？

本人の意思を踏み躪ってまでも？」

訝しげに摩南が問うと、少し語気を荒げたまま彼は答えた。

「力有る者が居るという事は、強いては自然を守る力が強まる事。
自然の精気を人が弱めてる今、僕の力を眠らせたままにはさせてくれない」

「龍の為だけじゃないんだね。

確かに：あの土地も変わっちゃった。

小さな川はなくなって、ダムが出来て、山も削られて道路が走ってる」

「力が望まれるならば、人から精を受けなくても済む様、早く全ての能力が目覚め、保てるようになりたい：

行き着いたのはそんな考えだ」

：ああ、そうか。

一族の人にも言えないのは、ちゃんと反発した事もある上で、自分の運命を引き受けたからなんだね。

目を少し伏せ、摩南からまなざしを反らし、蓮は自分の強い口調を後悔していた。

胡座を掻いた足を崩し、立てた片足に肘を着き、顎を乗せる。

「摩南に言う事じゃないな：悪い：つい。」

「大丈夫って言ったでしょう？ねえ、今はいなくても、昔の恋人は、我慢して待ってたんじゃないの？」

何処と無く、拗ねた様子の蓮は幼さを感じさせる。

目元に、頬にさらりと被る、白く輝く髪の間から、長い睫毛が縁取る切れ長の瞳が摩南を見上げた。

「摩南…高い能力は皆の羨望と称讃の的。

その為の行為だからと、僕が知る限りでは、皆、割り切っていたよ。

それに、僕自身…彼女達に、ここまで心をさらけ出す事も出来なかった。」

「なんで？」

蓮は、好きな人の本当の気持ちや姿を知りたいと思わない？」

「僕は…昔から、誰かを待ってる気がしてる。

それは、魂の片割れを呼んでると両親から聞かされていた。」

「蓮は、誰かの生まれ変わりって事…？」

「ああ、魂の転生は、たまに有る話だ。

唯、僕の過去の魂は、一族の誉れと伝わる者だけに期待する者が多くてね。

僕にとっては厄介なだけだ。」

…魂の半身か

…羨ましいな

摩南は、小さくふふっと笑い、

「その転生した魂は、出会ってすぐに判るの？」

と、拗ねた様子の蓮に向かい、優しく声を掛けた。

目元に被る髪を掻き揚げ、彼は小さく頭を振る。

「龍の魂は、身体が朽ちてしばらくは、守護する地に止どまるだが、その妻の魂は、次元を超え、人の世の魂魄に紛れてしまったらしい。」

龍体同士ならば、すぐに呼び合うが、人の器を持つと、魂の痕跡を辿るのは容易な事じゃないんだ。」

「巡り合えても、お互い判らないままの可能性も有る訳ね。呼び合うのに、何が切っ掛けになるんだろうね…」

…切っ掛けか。

何をどう探せば、巡り逢うかも判らない。
時が来ればと言われたが、何時の話かも判らない…

もし、もしも、摩南がその相手ならば、どんなに嬉しいだろう
転生した魂じゃなくとも、彼女と共に過ごせたなら、この虚しさも癒されるかもしれない…

だが、そんな事は有る筈も無ければ、出来る訳も無い…か。

蓮は、予想以上に摩南を想う気持ちに、微かに身体を震わせた

言葉だけじゃない。

もっと、側に寄り彼女に触れたい。

胸に抱き寄せ、この侘しさを消し去りたい。

重なる時で、この空間で欲情だけでは無く、心から欲した初めての女性。

いや、一族の者でもこれ程強く欲した者はいなかった。

伸びやかな脚を斜めに崩し、蓮の言葉を待つ無防備な摩南の姿

「摩…南…

もう帰った方が良い。

術で一瞬眠ればすぐに戻れる。ちゃんと送るから…

目覚めれば、唯の夢。

僕を覚えてくれていて嬉しかったよ。」

突然の蓮の言葉に驚き、摩南は蓮の側へと身を寄せ、彼の腕をぐい
っと引いた。

自然と顔が正面から向き合う形になり、摩南のもう片方の手は蓮の
膝に置かれた。

「私が、余計な事を聞いたからなの？」

なら、蓮の話黙って聞ける。

夢だと言うなら、もう少しだけ蓮の顔を見させて欲しい。ねえお願い。」

真っ直ぐに蓮を見つめるまなざしに、彼の体温がじわりと上がる。

惹かれる心と身体

二人は、しばらく無言のまま見つめ合っていた。
不意に、蓮の身体が前へと傾く。

「えっ…」

白く輝く髪が、摩南の額に掛かったと思った瞬間、彼女の唇は蓮の唇によって塞がれていた。

摩南の肩を空いていた手で引き寄せ、ゆっくりと味わうかの様に唇を奪う蓮。

「っん…っん…ハアッ…」

合間に漏れる摩南の吐息が、蓮の背筋をぞくりとさせる。

そつと唇を離すと、蓮は素直な気持ちを摩南に告げた。

「お願いだ、摩南。

このままだと、自分を抑え切れない。

摩南だからこそ、大事にしたいんだ…僕の勝手な都合で、抱いたり
はしたくないから…」

摩南の顔を隠す様に、自分の胸に閉じ込め、強く掻き抱く。

細身だが、しなやかな筋肉が付いた逞しい蓮の身体。
すっぽりと包まれた腕の中、顔を寄せた胸からは速まる鼓動が聞こえる。

蓮の熱い身体、掠れた声

そんな彼に、摩南の身体も徐々に熱が高まる。

重なった唇の熱さが、摩南の心と身体を震わせた。

…嫌じゃない。

遥か昔に会っただけなのに、蓮の側は心地良くて。

初めて会った時もそうだった。

そして、蓮が急に帰ると姿を消した後、ぽつんと一人取り残され泣きそうになった私。

あの後、おばあちゃんに話を聞いても、「近々、引っ越しをする家は聞かんなあ。」

山向こう言うても広いし…」と言われた。

「大丈夫。

摩南と同じ様に遊びに来た子なら、誰かに聞いたらすぐに判る筈やわ。」

でも、おばあちゃんが知り合いに聞いても誰も知らなかった。

「その年頃の男の子なら、すぐ判る筈やけどねえ。それか、墓参りか、神社にでも立ち寄っただけなんかもしれないなあ？」

それでも、小さな私は田舎に行く度に、あの川や裏の里山の祠へと足を運んだ。

自分の名を教えながら、はにかむ蓮の笑顔がもう一度見たかったから。

あの川で、水飛沫を掛け合う時の無邪気な彼と、もっと知り合いたかったから…

いつの間にか諦め忘れ去っていたあの男の子が、今、私の側にいる。

幼い時の面影を残しながらも、凛々しく眩しい青年の姿で。

そして、私の唇に触れ、身体を熱くさせているのだ

これが夢と言うならば…

「…夢なんでしょう…？」

蓮がそう言ったんだよ？それなら…構わない…」

摩南は、蓮の腕に閉じ込められたまま、囁く様に想いを伝えた

彼女は、柔らかな腕を彼の背中へ回し、そっと力を込め身体を密着させる。

摩南の思いがけぬ言葉に驚き、面を上げ、彼女の顔を見下ろす蓮の瞳。

顔を胸に埋めたまま、摩南は蓮に語り掛けた。

「蓮が言った通り、私だって大人になったんだよ
だから、蓮が私の事大切な思い出だって言ってくれる気持ちも判る。

でもね、すぐにまた違う人を抱かなきゃいけない…
それが、虚しいって言うなら…私を抱いていいよ…」

摩南は、そっと顔を上げ、蓮の瞳を見つめ返した。

どくりと胸の鼓動が上がり、自分の身体を中心に熱が集まるのを蓮は感じた。

自分の身体に抱き付く、しなやかな摩南の身体。
そして、押し付けられた、柔らかな胸の膨らみが、彼の欲情を引き

出す要素となる。

そして、くちづけた甘い唇から優しく零れる摩南の言葉。

「これが、

夢だから…か？」

「只の夢じゃないよ。

蓮との夢だから…

私ね、蓮の側にいるのが好きだったみたい。

だから、また夢で会えて、大人の蓮に抱かれるなら良いって思ったの…」

摩南は首を伸ばし、蓮の頬に優しく唇を落とした

彼女が唇を離れた瞬間、蓮の唇が素早くそれを塞ぐ。

摩南の唇を啄み、顔の角度を変え、幾度も幾度も柔らかさを求め、唇を貪る彼。

彼女は、彼の求めるままに唇を許し、そして、自分の想いを伝えるかの様に、自らも唇を尖らせ蓮の唇を挟みくちづけを返す

ハアッと息を漏らし、唇を解放した二人は互いに求め合っているのだと知り安堵する。

甘い沈黙を破ったのは、蓮の言葉だった。

「初めてだ…

結界の時の流れが緩いのが、こんなにも嬉しいものだなんて。」

…そう、初めてだ。

此处で、自分の望む相手と身体を交える事も…

蓮は腕を解き、摩南の頬を掌で包み引き寄せた。

「…蓮…」

彼の名を呼び、摩南は近付く唇に再び瞼を伏せる

蓮は、尖らせた舌先で摩南の唇の縁をそっと舐め上げ、優しく唇を割り開き、温かな口内へ舌を這わせた。

…蓮の優しくて熱い唇。

なんて、気持ち良いんだろう。

こんなにも胸がときめいて、もっともっとと求めてしまう。

初めて会うに等しい人に抱かれないなんて思えたのは、蓮だから…

お互いの事、何も知らないのに好きだって言えるのも彼だから
夢でも…こんな幸せな夢、初めてかもしれない。

零れる吐息と甘い声に反応し、蓮の舌先が、摩南の舌を誘う様に深く絡み付いてくる。

蓮は唇を合わせたまま、摩南の身体を柔らかな褥にゆっくりと誘った。

摩南の首の下に腕を回し、もう片方の手で彼女の背中を撫で、彼女の肌の温もりを堪能する蓮。

くちづけを交わし合う最中も、悦びと現実を確かめるかの様に微かに瞼を開くと、互いの瞳がぶつかりあう。

交わす想いの甘さ、
刹那の時の哀しさ、
様々な想いが揺らめく瞳

そんな想いを伝えながら、素直に反応を現す身体に、二人は益々蕩けてゆく…

摩南のシャツのボタンを一つ外す度、蓮は彼女の露になる肌に唇を落としきつく吸い上げた跡を残す。

ちりつと刺激を受ける感触に、小さく声を上げる摩南が愛しくて堪らない

蓮の残す紅い華が、摩南の首筋から胸元まで散りばめられてゆく。

そうして、纏っていた服を全て脱がせ、薄闇に摩南の白い肌がうつすらと浮かぶ様に、蓮は思わず息を飲んだ。

初めて裸体を見つめられ仄かに染まる柔肌の色。

彼女は、華奢な腕で、豊かな胸の膨らみを押さえ、脚を振じり下半身を隠し、蓮の食い入る視線を全身に受け肌を染める。

「ねえ…蓮も脱いで…？」

私だけなんて…恥ずかしいから…」

「ああ…」

と、掠れた声で頷き、彼は腰紐へ手を掛けしゅるりと解く。

彼は、緩んだ浅葱色の袴を、腰に引っ掛けたまま、真白な着物の紐を解き、胸元を裸けた。

そして、摩南の肩を優しく一撫ですると、ばさりと着物を脱ぎ腰を上げ袴から脚を抜く蓮。

「摩南…」

背後から抱き込まれ、耳元で囁く声に、摩南の身体が反応する
彼女の耳朵を優しく甘噛みし、蓮は白い肌へと手を伸ばした。

宵闇の結界に響く、摩南の甘い吐息と、蓮の優しい囁き。

二人の重なる身体の下では、柔らかな衣擦れの音。

互いの熱を感じ伝えながら、白い肌が闇の中で絡み合っていた……
……

※ムーンライト

【闇の恋歌】にて、二人の甘い睦言を執筆予定。

活動報告にてお知らせいたします。

刻まれた想い

………乱れた褥の上、汗を浮かべた艶やかな肌を、己の腕に閉じ込め、蓮は摩南に話し掛ける

「やっぱり、後悔しそうだ……」

こうして、摩南の肌に触れた事が忘れられなくて、他の事が考えられなくなりそうだよ……」

摩南は、汗ばんだ肌に顔を寄せたまま、

「私だって同じ……」

でも……忘れたくはないの。

だから、他の人みたいに術を掛けたりしないで。

夢としてなら、覚えておいても構わないでしょう？」

と、呟くように答えた。

そつと面を上げ、上目遣いに自分を見つめる彼女の瞳に、蓮の胸は一層苦しさを増す。

「私達……もう、逢う事も出来ないのかな？」

「いや、姿を見せる位なら簡単な事。

僕と摩南の波長は、良く合う筈だからね……」

そう…今から考えれば、真っ先に、摩南と引き合ってもおかしくなかった位なのに…不思議だな。」

蓮の頬を指先で撫で、摩南は自分の想いに耽る。

…また逢えたとしても、私達はどんな関係なんだろう？

全然知らない蓮の世界。

只、顔を合わせ懐かしい話をするだけなの…？

物憂げな表情の彼女を見つめながら、蓮は摩南の髪を指先で梳く。
彼女は、頬に触れる、優しい指先の感触に身を任せている。

「…引き寄せられた日以外で、蓮に抱かれるとどうなるの？」
摩南の唇から零れ落ちた言葉に彼は少し切なげな笑みを面に浮かべた。

「僕の精を受ける相手の身体から、生気を抜く事になる。
勿論、すぐに衰弱させるまでには至らないだろうが…

同じ性質の者は、話にしか聞いた事が無いから、詳しくは判っていないんだよ。」

「他の龍は？」

昔話や言い伝えに残ってるのは人の世の作り話なの？」

蓮は、その言葉に首を振る。

「遠い昔に、龍と結ばれた者が居るのは真実。

畏れ敬われたのが、神と呼ばれる者だからね。

解釈次第で話も変わるだろうが結ばれ、子を残した者もいるだろう。

」

…遠い昔か。

まだ、自然と人が密接だった時代なんだろうな。

「僕が、他の龍体と同じなら…

結界以外で、摩南に出会えていたら…側にいてくれた…？」

蓮は、切なげな溜め息を漏らし呟いた。

摩南の髪に唇を寄せ、囁く様に話し掛ける。

「矛盾だと判っても、そんな風に思うよ。

只の龍ならば、幼い日に人の世で一人遊ぶなど無いから、出会う時期は違ったかもしれない。

一族の幼い者同士で集い、目上の者の導きでしか、次元を超える事は無いけど…」

摩南を抱く手に力が籠る

「少なくとも…」

いつでも、愛しい人を抱けるのだろうか。」

「蓮…」

…もしかしたら、同じ人を引き寄せ無いのは、情が移らない方が楽だからなのかもしれないね。

人の命の方が短いなら、想いを残す龍の方が、一層辛いかもしれない。

…一年に一度しか、身体を交える事が出来ない辛さ。

でも、相手に会え、側にいるのなら、それだけで安心し、幸せを感じる事も出来るかもしれない。

だけど、龍は……

人が早く亡くなるのを知っていて、見送るのを覚悟しながら、生きていく。

先に逝くよりも、残され長い時を生きる龍には、遥かに酷だとしたら？

その自分の考えに、摩南の心が揺れる。

身体を繋ぐ直前にも、お互いに自分の執着に戸惑い、一瞬躊躇した二人だった。

反対に、残されるのが私なら？

…もしも、突然蓮の身に何か有っても、私は会いに行く事も、誰かに話を聞く事も出来ない。

蓮と会っていたのは、只の夢だと笑って過ごせる？

二人の時間が長くなり、濃密になる程、取り残される哀しみは増すんだよ…

摩南は、自分の考えに身震いした。

…蓮があんなに躊躇したのは、長い時間に取り残される想いを知っていたからなのかもしれない

それに、逆の私の立場も考えて？…

髪に寄せられた蓮の唇が摩南の瞼に落とされる。

「摩南？」

心配そうに彼女の瞳を覗き、そっと摩南の唇を塞ぐ。

優しく舌尖を忍ばせると、摩南の舌尖が蓮を誘い絡み付いた。

甘い吐息を交わし、深く激しく探り合った唇を離せば、銀色の糸が一筋お互いを繋いでいた。

「：色んな考えが溢れて来ちゃったの。

もし、このまま蓮と会うようになって、何か起これば理由も判らずに一人になるんだって。」

潤んだ眼で、淡々と語る彼女の言葉が、蓮の胸に響いた。

「それに：蓮と私がずっと想いが変わらなくて側に居ても、先に私はいなくなる。

蓮が、取り残される時間は、私よりも長いんでしょう？」

蓮は摩南の頬を撫で、静かに語り出す。

「そうだよ：摩南の言う通り、龍の生きる年数は、人とは比較にならない。

その中でも、僕は特異な者。

秘められた潜在能力が目覚める毎に、生命力も高まってゆくだろう。」

「人といっても寂しさが残るだけなの…かな…」

「人と同じで、先の事は僕にも判らない。

これから、摩南が運命だと思う相手と巡り逢えば、僕との出会いは、懐かしい不思議な思い出に変わる可能性だって有るんだ。

そうして、昔の話が伝えられ、形を変えて残っているんだからね。」

「そうだね。ごめん。

何だか、余計な事ばかり頭に浮かんでる…」

蓮は、指で彼女の顎を上げ、瞳をじっと見つめて言った

「摩南の疑問も不安も当たり前前の事だ。

知っていて事に及んだ僕とは違うのだから…だから、謝まるのは僕の方だよ…」

御免よと呟きながら、蓮は腕を回し彼女の身体を抱き締める。

摩南も、蓮の腰へと腕を回しながら、紅い跡が残るくちづけを彼の胸元に残していた。

ちりりとちいさな刺激が肌に走り、摩南の唇の痕跡が残される毎に、心が締め付けられる蓮。

…あんなに何度も果て、求め合ったにも関わらず、まだ足りない位に摩南が欲しくて身体が熱い。

彼女の身体を、この熱で貫いて溢れる蜜の奥に沈み、悶え啜り泣く悦びの声が聞きたい。

耳元で、絶え切れずに漏れる甘い吐息を、もう一度聞かせて欲しい…

既に、かなりの時間が経っている。

摩南が、快感に意識を翔ばし、気怠い身体を清めた後にも、見つめ合い唇を重ねれば、互いの身体を欲していた二人だった。

蓮はふと、薄闇に漂う炎に目を向ける。

枕元に揺らめく白い炎の色が、薄い蒼色になっている。

「この色が蒼になれば、宵闇の儀式は終わる。

あちらでは、そろそろ夜明け…

摩南を、此処から送り出す時間だ。」

「色が変わり始めてる…
もうすぐなんだね。」

二人は炎に顔を向け、静かにそれを見つめていた

蓮は身体を起すと摩南の腕を取り、起きる様に促した。

互いに何も纏わぬ裸のまま、瞳を交わす蓮と摩南。

蓮は、彼女の指先を持ち上げて言った。

「僕からしか、摩南に逢えない訳じゃない。」

そう言うと、彼女の右手に光る指輪にもう片方の手を添えた。

それは、乳白色のムーンストーンが嵌め込まれたカレッツジリングだった。

自分で形と石を選び挑めた、お気に入り指輪。

指輪の約束、心の確認

指輪に添えた自分の手に唇を重ねると、碧色の燐光が現れ二人を包む。

摩南の身体が光を受け、一瞬かあっと熱を帯びた。

それは、すぐに燐光と共に鎮まり、碧色に煌めくのは指輪の石だけとなった。

次第に、碧の光は石に吸い込まれ、中心に星の形を止どめ煌めき出した。

蓮は、ゆっくりと唇を離し、摩南に告げる。

「僕に逢いたいと思う時に、この石に摩南の念を込めてくれれば良い。」

唇を重ねて、逢いたいと強く願えば必ず僕が感じ取れるから」

「この指輪に願えば良いのね。」

摩南は、微かに光る石と、蓮の指先に唇を重ねた

「ああ。」

摩南、自ら人の世に渡る事が少なくなった僕だけど、人目を避け、次元を超えられる日が丁度一月後に有る。」

その日の朝、僕は、この指輪に力を送り摩南の返事を待つ：」

摩南が面を上げると、蓮の表情は曇り、昔の別れ際に浮かんでいた寂しげな笑みに変わっていた。

「もしも、僕に逢わない方が良いと思うなら：指輪の熱と、光が消えるまで外しておいてくれればいい：」

「蓮が：私に逢いたくないと思った時にも教えて欲しい。」

すぐに返された摩南の言葉に、蓮は一瞬戸惑った

「なぜ？」

僕が、摩南に逢いたくないなんて考える訳が無いだろう？！」

儚げな微笑みを返し、摩南は言った。

「逢いたくないじゃなくても、私と逢うのが辛いと感じるかもしれないから。」

蓮の事だから、そう思っても私が望めば、必ず来るつもりだと思うの。」

彼の手を包み、ぎゅっと握り締める。

「でもね、蓮の気持ちも大切にしたいから…

あ、あのね、自惚れてるとかじゃないよ。

…只…勝手に、そう思っただけで。」

摩南の気遣いは、心の片隅で危惧した蓮の不安を、物の見事に言い当てていた。

彼女への思いが溢れ過ぎて、逢うのが辛いと考えてしまいそうだった蓮の気持ちを。

いずれは、父の後を継ぎ一族の長に。

そして、蓮の能力ならば、あの土地を含む地方を統べる長になれると期待する者も多い。

もう一つは、転生したと語られる魂の事だった。

龍の一族の誉れと呼ばれた番いの魂。

再び巡り逢い、互いに魅かれ合うなら潔く摩南に別れを告げるかもしれない。

だが、摩南に心を奪われたままならば？

皆が知ればどうなる？

必ずや引き離され、摩南にも危害を加えるとも限らない。

そんな想いを抱えていた自分。

蓮は、彼女の言葉を聞き、予測にしか過ぎない考えに、何処か怯えていた自分を恥じた。

…今、素直な気持ちを伝えなければ、余計に摩南に心配されてしまうな。

蓮は、摩南の手を解き、腕を引き寄せその問いに答えた。

「摩南…判ったよ。

もし…もしも、僕が摩南に逢うのが辛いと思ったら…この石に封印した僕の念を解き放ち、光を消し去る。それで良いかい？」

蓮の瞳を見つめ、小さく頷く摩南。

「うん…」

…彼女の心は、僕よりも遥かに優しくて…強いのだろう。

「蓮と別れて…いつもの自分の生活に戻ってからの方が、寂しさが込み上げて来るのかもしれないね…」

「僕も…同じだよ。」

一夜だけとは言え、摩南の事を離したいとは思えない。」

蓮は、褥の傍らの真白な着物に手を伸ばし、ふわりと摩南の肩に羽織らせる。

袷を閉じる指先は、宝物を扱う如く限り無く優しい。

「さあ、そろそろ身支度を整えて…身を清める時間も削ってしまつて御免よ。」

摩南は、ふふつと笑い、

「お互い様でしょ？」と、顔を綻ばせた。

「部屋まで送ってくれるの？」

それなら…蓮の着物を着たまま帰りたい。駄目…かな？」

良いよと返事をする、蓮は立上がり、「少し待ってて。」と部屋の隅へと足を運ぶ。

蒔絵を施した、小振りの箆笥を開き、中から取り出したのは、贅を凝らした絞りに、龍の模様が浮かぶ柔らかな絹の兵児帯。

「これを…」

着物に手を通した摩南に、鉄紺の帯を手渡す蓮。

「うわぁ…綺麗…これを使っても良いの？」

「ああ、摩南が持っていてくれれば、僕だって嬉しい。」

摩南は、引き締まった蓮の裸体に、少し恥じらいを感じ、目を伏せながら身支度を整え始めた。

そして、彼も着替えにと用意されていた、真新しい着物を広げ袖を通す。

蓮は、彼女が巻くには長めの自分の帯を身に纏う摩南を、幸せな思いで眺める。

彼女の肩先に掛かる濡羽色の髪と、鉄紺の帯が真白な着物に映えて美しい。

彼は帯を締め終わると、褥に座る摩南を、背後から抱き締め黒髪に顔を埋めた。

「身体は大丈夫かい？」

夢中になって、摩南に無理をさせてしまっただろう？…」

蓮の言葉に、彼女の頬が紅く染まった。

幾度も焦らされ、互いに求め合い、蓮から与えられた快感に酔い痴れた身体には、まだ余韻が残っている。

蓮の温もりと言葉に、一瞬どくりと鼓動が上がった。

「大丈夫…私が、蓮に抱かれたかったの。
無理は…してないよ。」

…思い出すとぞくぞくする。あんなに、蓮の表情が変わるなんて。

優しくて切なげな微笑みとは違う、蓮の男の顔。

闇に揺れ、ゆらゆらと色を変える彼の瞳。

その眼差しに支配される感覚にどんどん溺れてた…

摩南は、悦びに乱れ喘いだ自らの姿を思い出し、今更ながら恥ずかしさに身体を熱くする。

蓮は、髪を掻き分け、白い首筋に唇を落とし、新たな華を散らす。

はぁっと甘い吐息を漏らし、摩南の頬が更に朱く染まる。

「摩南の、夢中になる声が…もっと聞きたいのに。

可愛いく啼いて…

僕を欲しがる声…」

彼女はゆっくりと振り向き、蓮に柔らかな唇を重ねる。

じつくりと、互いに唇を味わう二人。

しばらく接吻に夢中になっていた蓮の意識に、空間の僅かな揺らぎが時間の終りを告げた。

弾む吐息を漏らしながら、蓮は唇を離す。

二人を繋ぐ銀色の糸が、唇から離れ、ぷつりと切れた。

「もう時間…？」

炎に目をやれば、それはすっかり蒼く染まっている

言葉無く、炎を見つめる二人の瞳。

その揺らめきを移す様に、柱の周りを取り囲む暗闇がぐらりと歪んだ。

「次元の歪みに巻き込まれれば、摩南の身体が辛いからね。
さあ…」

蓮は、彼女の手を取り、自らも立ち上がる。

傍らに纏めて置いたバッグと、服を胸元に抱え、摩南は蓮の身体に身を寄せた。

「ほんの一瞬、意識が途切れるからね。
良いかい？」

「うん…」

小さく頷き、自分を見上げる彼女の目元を蓮は掌で包む。

ぽわりと碧色の燐光が薄闇に光った。

がくりと摩南の四肢が緩み、蓮は両腕で彼女の身体を抱き上げた。

歪む暗闇へと足を進めた後、彼は振り向き部屋を見渡した。

寝乱れた褥。

微かに漂う摩南の残り香

「このまま…」

封印しておこうか…」

誰も立ち入らぬ様、二度とこの部屋で、誰かを抱く事など無い様に…

また、新たなに結界を設ければ良いだけの事

念を込める蓮の身体からも、揺らめく碧の光が立上ぼる。

光は部屋全体を包み、この部屋は、摩南との思い出の時間と共に封印される。

腕の中、自分の衣服を纏い、束の間の眠りに落ちる彼女。

蓮は、儂げな笑みを口元に浮かべると、想いを吹っ切る様に暗闇に身体を沈ませた。

蓮の放つ碧の炎は、瞬時に暗闇に融け、残されたのは静寂。

それと、乱れた褥の枕元に揺れる、蒼い炎の妖しい煌めきだけ。

龍と人との交わりの夜は静かに終る。

だが、蓮が気付かぬ事が一つだけ有った。

蒼く色を変えた炎は、摩南が去った後も消えぬまま闇に浮かぶ。この結界に、人の気が無くなればすぐに立ち消える筈の炎。

それは、未だ揺らめき、色を止どめていた……………

夜風が優しく摩南の頬を撫でる。

ふと目を覚ませば、そこは既にあの公園の木立ちの中。

柔らかな碧色の光に包まれ、蓮が腕に抱き上げた摩南の顔を眺めている。

「摩南…

ほら、もう月が沈む…」

ゆったりと空の端を染め始める朝焼けの色。

白く霞み、輝きを消す月が彼方に見える。

…また、いつもの私の日常に戻る。

でも、そこに蓮はいない。

ぎゅっと着物の袷を握り締めたのは、夢ではないのを確認する為。

蓮の纏った衣装と、指輪の煌めきだけが、摩南に残される宵闇での

証し。

「ねえ…このまま部屋の玄関まで送って？」

「勿論…摩南が大丈夫なら。」

彼を見つめて頷けば、一瞬にして目の前の風景が見慣れた物に変わる。

明りが着かぬ玄関。

薄闇の中、蓮は抱き上げていた彼女を床にそっと下ろした。

「ありがとう、蓮。」

抱えた荷物を靴箱の上に置き、摩南は彼の胸へと再び顔を埋める。

「明るくしちゃうと淋しくなりそうだから…このままでお別れしても良い？」

「そうだね…」

言葉を終えると、二人はごく自然に唇を求めていた。

薄闇で浮かぶ互いの輪郭を辿り合い、吐息の熱さを確かめようと幾

度も唇を啄む二人。

奥の部屋のカーテンは、少しづつ朝の光を受け、明るく染まり始めた。

「じゃあ、一月後…」

「うん…どんな答えを選ぶかは蓮の自由だからね。」

「ああ、判ってるよ。」

摩南…おやすみ。

良い夜をありがとう…」

朧に薄闇に浮かぶ、蓮と摩南の微笑み。

「おやすみ、蓮…」

碧の光は輝きを増し、摩南の身体をぎゅっと抱き締めると、蓮は幻の如く消え去った。

彼女は、指輪に残る碧色の煌めきにそっと唇を落とし呟く。

「蓮…」

…このまま、蓮の着物と蓮の匂いに包まれて寝ようか。

そんな事を思いながら寝室へ行き、窓のカーテンから顔を覗かせ、公園を眺める。

ぼやけて朧気な月が、空の端に微かに姿を止どめていた。

不思議な一夜…

だが夢とは呼べぬ、確かな温もりが、摩南の身体のそこかしこに残されている

「少し…眠ろうかな…」

窓から離れ、布団へ潜り込む。

いつもとは違う肌触り。

胸元に目をやれば、蓮が散らした紅い華が、幾つも散りばめられていた。

ふっと顔を綻ばせ、摩南はそっと瞼を瞑った。

まどろみの中、蓮との一夜を思い返しながら……

指輪の約束、心の確認（後書き）

第一章終了です。

この後は、他キャラも出てきます。

番外編キャラの蓮の両親も登場しますよ。

第二章・龍の宮◇目覚めてからの想い

摩南は、窓から日の暮れかかった公園を眺める。

柔らかな陽の光の中、風にはらはらと舞う桜の花びらを眺め、彼女は蓮との甘い一夜を思い出す。

夢…？

夢だと思えた方が良かったのかな…

摩南は、そっと指輪に目を落とした。

乳白色の中に煌めく、碧の光。

壁に掛けられた、真白な着物と鉄紺の帯が、現実だった事を知らしめる。

「でも…他の人みたいに、只の夢だとは思いたくなかったんだよね…」

あんなに二人で居る事が自然だと感じるなんて…

「魂の片割れか…」

人の世に、転生してるって言ってたよね。

それが、私だったら良かったなあ。」

それなら、ためらう事無く、蓮は私の側に居てくれるかもしれない。

夢みたいな話に戸惑っても、蓮がいてくれるなら、この不安を吹き飛ばせるかもしれない…

「龍の魂の生まれ変わりって、どうしたら判るのかな？
…まあ、少なくとも私じゃないのは確かだけだね。」

そう…きっと、出会っただけで触れ合っただけで、何かが判る筈だもの。

「羨ましいな…」

摩南は、ぼつりと呟いた

再び出会って、すぐに恋に落ちたのに、喜びよりも寂しさの方が増してゆくなんてね。

摩南は、出会ってすぐに蓮に魅かれた自分自身に戸惑いは無かった。
今までの摩南ならば、好感を抱きすぐに打ち解けたとしても、更に

互いの事を知り、自然に二人で過ごす時を待つ筈だった。

人当たりも良い、物怖じもしない彼女だが、相手に素の自分を見せるまでには時間があつた。

多分にそれは、幼少の頃から大人としての振る舞いを求められた事も関係しているのだろう。

蓮と出会った母方の田舎。

龍神を奉る社を代々守り続けたのは、摩南の祖母の家系だ。

勘の鋭い摩南の祖母は、幼い頃から『龍神様がいらっしゃる』と、雨を、川の氾濫を見事に言い当ててみせた。

嫁に行った後も、その勘は衰えず、社の祭や他の祭事にも声を掛けられる事も度々あつた。

旧家の祖父と、神を奉る血筋の祖母。

土地、財産、人脈と人柄を併せ持つ者への信頼は絶大だ。

そして、人が集えば、裏表の顔を持つ者達も集まる。

開発で、川沿いの土地の買収が始まると、殊更それはひどくなっていた。

だが、摩南の母と言えば、父との諍いに気を取られ、親族とのやり取りと言えば自らの弱音ばかり。

そんな彼女は、母から褒められる為、大人達の話を理解しようと頑張る摩南の姿に甘え始めていった。

家や親戚達の前で、自分の弱さを託びながら、

「それでも、摩南はこんなにしっかり育っているのよ。」と言い、無言の内に摩南へ要求したのだ。

元々、摩南の祖父が溺愛し、甘やかされた性格の持ち主。

厳しく躰られてはいたが、母はいつまでも心の自立をしようとはしない人だった。

母の言葉に悪気などないのだが摩南は褒められる為に、無意識に自分を大人びて見せていた。

摩南の母は、摩南の父と出会う前に一度結婚し、子供を連れ離婚している

その後、摩南を妊娠し、四つ年上の兄を連れ、再婚したのだ。

祖父は、溺愛する長女の初孫、即ち摩南の兄を、目に入れても痛くないと言う言葉の通り一番に可愛いがっていた。

再婚した当初は、自ら田舎に兄を引き取り育てた程だ。

摩南も、祖父に可愛いがられたが、手元で育てた兄は特別らしい。

摩南と兄との関係は良好だったが、たまに疎外感を感じる事も少なくなかった。

そんな摩南に、

「無理せんでええ。

摩南は、まだ子供なんやからなあ。」と、祖母は優しく言ってくれた。

そして、自分と同じ様に勘の鋭い摩南に、社や裏の里山の祠に纏わる話を聞かせてくれる。

「ここらの土地には、龍神様が住まわれとる。

あつ、雨が降るなあ思うて雨が降ったら、それは龍神様の気配を感じられる言う事や。

ほんまは特別のもんでのうて、皆が感じる事が出来るもんなんやけどな。

摩南は、うちの血が濃く出とるみたいやな。」

そんな他愛ない時間が楽しくて、摩南は祖母と過ごす時間が大好きだった。

祖父が亡くなり、祖母が独りで暮らすようになってから、摩南はより一層あの土地が好きになっていた。

祖母に教えて貰った通り、遊びながら龍の気配を感じると、無邪気に笑う摩南。

学校が長い休みになれば、一人でも田舎に泊まりに行き、あの土地を散策し遊び回った。

大人達に見せる顔を外し、無邪気な子供の振舞いの摩南を、祖母は優しいまなざしで眺める。

足腰が弱り、田舎暮らしがきつくなった祖母が、街の叔母の家に来る事になり、何時しかあの土地に訪れる機会も減ってしまった。

家での両親の諍いが続く中、時折思い返す田舎の風景。

それは、とても彼女の心を和ませるものだった。

あの場所と、祖母の思いやりがなければ、人に素顔を見せる事が苦手になり、自分の心を閉ざしていただろうとも思う程に。

「…おばあちゃんが生きてたら笑って話を聞いてくれたかな？」

くすつと、摩南の口元から笑いが零れる。

「龍の気配を感じる力…」

だから、あの時、蓮の姿を見る事が出来たんだろうね。」

蓮の切れ長の綺麗な碧色の瞳。

私を欲しがる、熱い眼差しが忘れられない。

あんなに、何度も求め合ったなんて初めて…

自分でもびっくりする位、身体も心も蓮を欲しがってた。

あれは、蓮の身体が抑制が効かなかったせいだから？

それとも、一夜を過ごす為の、あの結界の中だから？

私が夢かもしれないと思うのと同じで、蓮もあの結界から出たら、私の事を夢みたいだと思うのかな。

年に一度の夜の熱が冷めたら、この指輪の約束も重いだけのものになるのかも。

『この指輪に、唇を重ねて強く念じれば、必ず僕が感じ取れるから』

また逢う為の約束は、一月後。

今すぐにでも、指輪に唇を重ねて、蓮にこの想いを報せたいけど…

まだ、現実だと信じられない気持ちが本音。

夢なら、夢を見たままの方が幸せかもしれないから。

勝手に恋して、焦がれて泣くなら諦めも早いもの。

摩南は、指輪に手を重ねその上から唇を落とした

「これでも判ってくれたら嬉しいな…」

ふうっと、溜め息混じりの言葉を漏らす。

彼女は、指輪の石にきらりと輝く碧の星を、飽きる事無く眺める。

こんなにも深く、蓮を求める自分に戸惑いを感じながら。

その心の中には、強い想いへの怯えも潜んでいたのかもしれない。

蓮に逢えば必ず、どんどん溺れてゆくと摩南は確信していたからだ。

そんな切ない想いを抱え、彼女は夕闇迫る空の下、ベランダに佇む。

彼女の肩に、髪にふわりふわりと桜色の花びらが舞い踊っていた。

宙空の花園にて

春。

見渡す限り満開の春の花。

薄紅色の花びらを散らす樹々だけではなく、足元を見やれば黄色いタンポポ、菜の花、蓮華草。

有りとあらゆる春の花が、春の宴を賛美するかの様に、豊かに咲き乱れる宙空の花園。

霞漂う幻想的な光景の中には、寄り添い仲睦まじい二人の姿。

一族の長である、蓮の父の鎮耶シズヤと、母の朱璃アカリが宙に手を翳し微笑みを浮かべ佇んでいる。

「さてと…

この位、湿り気を与えておけば宴の最中も、綺麗に咲き誇ってくれているでしょう。」

極上の笑みを浮かべ、鎮耶に向かい朱璃が言う。

額の真ん中で分けられた黄金色の豊かな髪は、輝き波を打って腰を覆う程長い。

頭に止められた額飾りの中央には、瞳と同じ色をした紫水晶が飾ら

れている。

巫女装束にも似た、緋色の袴と真白な着物。

その上から重ねた、裾の長い透けた白い羽織物には、手の込んだ金糸銀糸を取り混ぜた刺繍が、艶かな蝶達を浮かび上がらせていた。

「昇龍を迎える春の宴を花も木も喜んでいるだろう。

それに、我等夫婦が揃って精気を与えているのだからな。」

声高らかに笑い声を上げるのは龍の長の鎮耶。

濡羽色の漆黒の長い髪は後ろで束ねられ、妻と同じく腰まで続いている。

繊細な蔦模様が織り込まれた艶やかな黒の袍、深い紫の袴姿。

長としての誇りと威厳に満ちた眼差しは、優しく妻を見つめていた。

「蓮は…宴を楽しんでくれるかしら？」

周りの者ばかりが浮かれているよりも、本当は蓮に一番楽しんで貰いたいのに。」

「いつもならば、卒無く皆をあしらうだろうが…

今回は、どうだろうな」

結界から戻った蓮が、心配する長老達を宥めた後、両親に告げた話。

『滞りなく、一夜を過ごしたのは確かな事です。』

幼い頃の、顔を見知った相手だと言うのも真実。

只…皆に告げなかったのは、僕が彼女を愛しいと思い、少しでも長く共に過ごしたいと願った事』

真摯な眼差しで語る息子に、余計な言葉は掛けず、静かに頷いた二人だった。

「同じ年頃の龍体は側にいず、一人あの社の結界で遊んだ頃の出会いですもの。」

蓮にとっては、大切な思い出なのでしょうね。」

「そうであろうな…」

何せ子守役、指南役の大人ばかりだったのだから。」

「鎮耶…その娘が言い伝えの、魂の片割れと言う可能性は？」

深い溜め息が、鎮耶の口から漏れる。

顎に手を掛け、首を捻り、彼は妻に語り始めた。

「朱璃。お前も承知しているだろう？」

先祖が、人界での痕跡を辿る事すら出来なかったのを？

魂魄が一族の結界を離れ、皆で急ぎ探索したが、解らぬままなのだから。」

「その娘は、微弱でも、龍の神気を宿してたりはしないのかしら？」

人の世に転生した者は、多かれ少なかれ、必ず龍の気を残している筈…。」

「それなら、とっくに蓮が気付いているだろう。何も言わぬなら、その痕跡が無いと言う事だ。」

鎮耶は、そっと朱璃の肩に手を回した。

ごく自然に、彼女は長の胸元に頭を預ける。

「私…蓮が心配なのです

皆と同じ、単一の性しか操れぬ龍体の方が、幸せだったかもしれないかったわ。」

鎮耶は指先で、黄金色の豊かな髪を梳く。

「まあ、意に染まぬ儀礼もこなさねばならぬ身だ。

今の時点で、この宿命からは逃れる手段が無い上、替わる物も見つからぬからな。

だからと言って、他の者に愚痴も零せぬ身というのは、かなり辛いと思うが…」

「是ばかりは、仕方有りませんものね。」

長い年月を経て、漸く誕生した完全たる龍。

朱璃が腹に宿した時点で、彼女の持つ水以外の精気を感じ、夫婦共に驚愕した日の記憶は、今でも鮮明に残っている。

更に二人が驚いたのは、産まれ出た赤児の肌に浮かび上がった模様。

全身に巻き付く二体の龍の姿。

そして、薄く煌めきを纏う模様と共に、蓮の枕元に朧に浮かぶ、銀色の髪を持つ男の姿。

ゆっくりと瞼を開けば、澄んだ空色の瞳が覗き、鎮耶と朱璃を静かに見つめている。

「貴方は…」

『私の魂は、赤児の魂の奥深くに眠るだろう。』

子が半身を求め哀しむ事が有っても、それは魂に刻み込まれた想い。

片割れに惹かれるも、新たな出会いを望むも本人次第だ。

この者の選ぶ人生を、他者が曲げる事が無い様、長の口から皆に伝えよ…』

そう言い終えると、臃げな姿はその場ですうっと立ち消えた。

「貴方…」

「ああ、話に伝わる通りのあの容姿。

あの、研ぎ澄まされた神気。

間違え無い…

リョウウガ
療駕様だ…」

誉れと伝わる番いの龍。

この一帯のみならず、龍王と呼ばれた古の長。

鎮耶と朱璃は、遙か昔の長の言葉を重んじ、臣下にもその言葉を伝えた。

「…あの後、皆には言い聞かせたが、期待をするなど言うのも無理な話だ。

まあ、だからこそ海底の宮から離して育てたのだから…」

「でも、燎駕様のお言葉がなければ、皆はもっと多くの期待を蓮に背負わせたでしょうね。」

「先見の明と言わすべきお言葉だったな。」

二人は顔を見合わせ、互いに頷いた。

「蓮は、彼女に逢いにゆくのかしら？」

「…まだまだ、迷いの中から抜けてはいまい。」

確かに、その娘は蓮との波長が合うのだろうが、普通の恋人同士とは訳が違う。

…辛い事が多い…」

朱璃は、そっと鎮耶の腕に指を絡ませる。

「身体を繋げる事さえままならぬ上、人の寿命は余りにも短いのですもの。」

理も、時の流れが違う次元の者
ましてや、蓮は次代の長…」

鎮耶の手が、そっと朱璃の指を包み込んだ。

「蓮の選ぶ道だ…」

余程の無茶をしない限り反対はせぬよ。」

「そうね…」

彼女との恋に走っても、二人が過ごせる時間が短いのは、蓮が一番判っている筈。」

「我々から見れば、蓮の生はまだ始まったばかりだ。

儂の跡を継ぐまでに、時間はたつぷりと有る。

人の娘に、想いを寄せるのも若い内だけだろうよ。」

「そうね…

長い生を、共に過ごせる相手も良いと思う日が、きっと来るでしゅうから。」

朱璃は、鎮耶の腕を引き寄せ身体を預けた。

二人は、幻想的な花園の光景を見渡し、幸せを噛み締める。

「蓮にも、儂の様に良い伴侶と出会い、共に生きる幸せを感じて欲しいものだ。」

思わず顔を綻ばせ、朱璃は答えた。

「鎮耶、嬉しい言葉をありがとう。
でもね、蓮は貴方の息子。

数年もしたら、一人に決め兼ねる時期が来るかもしれないわ。ねえ、

お兄様？」

朱璃は、鎮耶に比べるとかなり年若い龍。

幼い龍体の頃に、若い長の鎮耶が、妹代わりに可愛いがっていた時期がある。

昔から、男性としての魅力と、才気溢れる若き長の周囲には、朱璃も見惚れる眩い女性達が、彼を取り巻いていた。

昔と変わらずに、長に面と向かい、嫌味などでは無く、素直に言葉を告げるのは心許せる愛しい者。

苦笑しながらも、優しく朱璃を見つめる鎮耶の眼差し。

正に、彼女は幼い日から龍神の掌中の珠。

美しく花開き、凜とした清冽な物腰は、男女を問わず皆を魅了した。

妻となり、艶やかさを増した今でも、鎮耶と朱璃は昔と変わらず、互いに本音を話す。

朱璃は、長の孤独を分かち癒すであろう、自分の立場を良く判っていた。

だからこそ、蓮にも良い相手と巡り逢って欲しいと願うのだ。

人の世に転生した魂が、人の器を亡くした後に、再び龍の魂として甦るかは定かでは無い。

ならば、年若き内に半身と巡り逢い、幸せな思い出となれば良いと望んでいた。

そして、人の娘を愛しく思うのも若い内なら良いだろうと。

年を経て跡を継いだ頃、長い生を共に生きる相手を、一族の中から娶れば良い。

二人は、そんな風に思っていた。

只、今回の蓮の話は、全く予想外だったが。

転生した魂を宿す相手ならば、身体を繋げても影響は無いだろうが、波長が合いやすいと言うだけでは訳が違う。

求めるままに彼女を抱けば、神気に当てられ、身体から生気を奪う事になる。

一度位で衰弱はしないだろうが、何度も繋がれば身体が弱ってしまうのは間違い無いだろう。

龍の力を押さえながら、長年側に居るのも、人に与える影響は大き

い。

様々な方法を試みたとしても、多大な負担が掛かるのは確かなのだ。

「もうそろそろ、皆集まって来る頃だわ…」

「ああ、中に戻って支度を整えるのでしょうか。」

朱璃を抱いた腕を開き、鎮耶は彼女の手を取った

霞の中にぼんやりと浮かぶ、春の宴が催される神殿へ向かい、二人は足を進める。

「きっと、韻^{ヒビキ}が蓮を伴って来てくれるわね。」

「蓮の話も聞いてくれているだろうよ。
良い友がいて良かったな。」

未来の長と、それを支える未来の臣下に鎮耶の顔が綻ぶ。

「二人の昇龍する姿。
とても楽しみだわ。」

朱璃も、鎮耶を見て微笑んでいる。

春、龍が空に昇る日。

兄とも慕う鎮耶が、友を引き連れ空翔ける姿。

若き長となり、憧憬を抱き見つめた日。

そして、後に愛しい者の晴れ姿となった。

蓮が成人してからは、夫婦共に、子供の成長に目を細める至福の間。

目と目を見交わし微笑む、龍の番い。

言葉に出さずとも、心の中で二人が願うのは、蓮の事だった。

自分達の様に、互いを支え癒せる伴侶に。

そして、切なさを埋めてくれる、魂の半身に早く巡り逢えるようにと。

咲き誇った春の花の中で、ぴたりと寄り添う龍の長と最愛の妻
春の宴が、もうすぐ始まる……

春雷

少しづつ長くなった、春の陽射しが傾きかけていた。

山間を流れる澄んだ水。

大きな岩が重なり削られ、様々な風景を見せるこの上流は、名勝と謳われている。

薄く雲が棚引く空。

ほんのりと、夕焼けの色を映す雲が美しい。

そんな中、遠くでゴロゴロと微かに響く雷鳴。

「ああ、龍神様か？」

社の境内に集っていた者達が、空を見上げた。

「ここ何年も、春になると決まって、見事な稲光が拝めるからなあ。

」

「あれやな、志柳^{シリユウ}の婆さんがおったら、龍神さんが天に昇られる日じゃ言う筈や。」

皆は、あははと顔を見合わせ、微笑み合った。

「今は、婆さんみたいに勘の鋭いもんはおらんけど、あの見事さ見たら、龍神さんて信じてまうわ。」

「ほんまになあ。」

どンドンと雷鳴は大きくなり、黒い雲が社の周りに集まり始めていた。

雲の隙間から、閃光が走る。

白く輝き、弾ける鋭い光の束。

「さあ、しばらく中入って、春雷を拝ましてもらおか。」

「多分、すぐに雨が降りよるじやろ。」

雨が止むまで、茶でも飲もうや。」

神主衣装の年配の男が、皆を先導し中へと招く。

集っていた者達は、他愛ない世間話に花を咲かせながら、境内から姿を消していった。

社の上、薄暗く立ち込める雲はぱらぱらと、細かな雨を散らし始める。

バリバリバリッ……

轟音が鳴り響き、雨脚は激しくなり、幾重にも厚く重なる雨雲。

閃光は徐々に大きさを増し、山頂を駆け抜け、空を走る。

ゴオッと風を巻き上げる音が轟いた瞬間、真っ直ぐに天と地を結ぶかの如く、眩い閃光が走り抜けた。

まるで、長い龍体をくねらせたかの様に、それは厚い雲を切り裂く。

春雷：龍が空翔ける証し。

それは、蓮と韻が、水底の宮から結界を抜け、宙空の結界へと移動する姿。

春の宴が始まる合図……

龍の姿となり、空を翔ける二人。

蓮は、雲の隙間からちりと覗く里山を眺め、懐かしい日々を想いを馳せる

摩南と始めて出会った山の祠。
はしゃいで遊んだ、あの小川。

一人で散策し、自然の精を持つ者達と触れ合った数の方が多いにも関わらず、この土地で懐かしく想うのは、彼女との出会いだった。

彼女と再び出会い、尚更その想いを強く感じる蓮。

…忘れていた様でも、この風景を懐かしく想っていたのは、やっぱり、摩南との出会いが、どこかに残っていたからか。

雨混じりの風が、心地良く蓮の身体を、宙へと押し上げてくれる。

閃光の中、白く輝く龍の鱗。

その隣りには、稲光を跳ね返し煌めく漆黒の鱗。

轟々と風のうねりが聞こえる中、蓮の目線に気付く韻。

鱗が煌めく長い身体は、まるで水を泳ぐ様にしなやかに宙を舞う。

「何の物思いに耽ってるんだ！蓮！」

声ならぬ声が、蓮の頭の中に届いた。

笑いを含んだ韻の声に、蓮も笑って答える。

「風が気持ち良いのも確かだが勿論…彼女の事を思い出してたよ。

初めて出会った頃もな！」

二人の笑い声に反応するかの様に、辺り一面に稲妻が走る。

韻は、蓮の周りをぐるりと泳ぎ、尾を振り上げて悪戯に小さな竜巻を起こす。

風が渦巻く竜巻の中心を、真っ直ぐにその身を伸ばしながら旋回し、宙へと突き進む蓮。

戯れ合いながら、二人が空翔ける姿を、遙か眼下の人界の者達は、龍が昇ると眺めている事だろう。

そして、宙空の結界からも、数々の龍達が誇らしげに、次元の境を見つめていた。

花園の端から下を覗けば、まるで薄い硝子を嵌め込んだ空間が、ぽっかりと雲の間に空いていた。

閃光の中心に、身を踊らせる二匹の龍体を、皆惚れ惚れと眺め早く来ないかと待ち侘びているのだ。

「このままお前と、こうして遊んでる方が、気楽で楽しんだけどな。」

韻は、悪戯を止め、蓮の隣りに並んで言う。

「お前が、いないと皆がつまらぬだろうよ。」

それに、本音は、僕も場をやり過ぎす相方がいないのは窮屈なんだ。今日も、上手く立ち回ってくれるだろ？」

くすりと笑い、蓮は韻の身体を長い尾で軽く叩き、上空へと促した。

「さあ！」

次元の境を超えるぞ韻！」

「分かったよ。」

素直に従うさ！」

脚を一翔けすれば、しなやかな龍の身体が、ぐんと宙を泳ぐ。

次元の境に近づくに連れ、白い鱗と黒い鱗を纏う身体の表面は、一層きらきらとその輝きを増した。

雨に濡れたその輝く龍体は、正に稲妻の如く閃光を発し、硝子の様な空間の穴へ、身を翻し飛び込んでゆく。

硝子に吸い込まれ、宙に消えてゆく二匹の龍。

その瞬間、雷鳴は辺り一面に轟き、白い閃光は、厚い雲の間から地上へと降り注いでいた。

それを最後に、徐々に雨脚は弱まり、稲光は治まり始める。

重なり合った雲は、風に散り始め、隙間からちらりと空を覗かせる。

天と地を駆け抜けた龍の姿。

人界の者、天に待つ者。

両者が共に眺める中、春の空を彩る。

「……今日も、見事な稲光やったなあ。」

社の縁側から、空を眺める者達は、目を細め語っている。

「春雷言う位じゃ。」

これからどんどん暖こうなって、春真っ盛りになるわな。」

明るさを取り戻す空の下、再び鳴き始める鶯の声が山に響く。

薄れた雲の間から、黄昏が近い柔らかな陽射しが山々を映し出していた。

春の宴

様々な煌びやかな装束を身に纏い、龍達が集う春の宴。

上座には、一族の長、鎮耶と朱璃が並び、その脇には蓮の姿が見える。

臣下達の堅苦しい挨拶も終り、長の計らいで無礼講となった宴では、楽しいに杯を交わしながら、皆思い思いに席を移していた。

「蓮。もしも、宴に疲れたら、ちゃんと私に教えてね。

皆も、貴方の姿が見れて安心したでしょうから、長居をせずとも良いですよ。」

朱璃は少し声を落とし、息子に気遣いの言葉を告げた。

「大丈夫ですよ母上。

別に初めての宴でもない。

皆に構われ過ぎる前に、韻がどうにかしてくれる筈です。」

蓮はにこやかに微笑み、母に答える。

「少しは…気持ちちが落ち着いたかしら？」

「ええ…。」

まさか、昔を知る者と結界に籠ると思っていなかったから…
少し…動揺してたかな。」

ふうと朱璃は、溜め息を漏らした。

足付きの杯を片手に、こくりと一口甘い酒で喉を潤す。

「蓮…この話は、私達の口からは、誰にも漏らさないつもり。
自分自身の思うがままにやれば良いわ…」

優しい口調だが、その眼には厳しさも浮かんでいた。

蓮には、母の無言の想いが良く分かる。

どれを選んでも、迷いと哀しみを伴うのだからこそ、心を強く持て
と言うのだろう。

今、こんなにも溢れ出す想いを諦めるのも、確かに辛い。

だが、人と共に過ごすならば相手は自分よりも、早く年老い死んで
ゆく。

「しばらく時間が欲しいな…

無茶をするつもりは無いからご安心を。」

蓮は、声を潜め母に呟いた。

「そうね…

ゆっくり考えなさい。」

蓮は、二人を見つめる父の鎮耶の視線にも気付いた。

母の隣りで酒を傾け、臣下達の話に耳を傾けながらも、蓮の事が気になっていたようだった。

蓮は、心配無いとでも言う様に、鎮耶に小さく笑みを見せる。

そんな、小さなやり取りに気付かぬ者達は、微酔いに任せ幾人かつ、酒を注ぎに上座の側へと寄って来始める。

そんな顔触れの中、韻は長老頭の父の脇で苦笑いを浮かべ、鎮耶の前に腰を下ろし挨拶をしていた。

その後ろに控える、風龍の一族の中には、年若い女の姿も幾人か見える。

…韻が苦笑する訳だ。

蓮は、思わずふうと溜め息を漏らしていた。

…摩南が側にいれば、この宴ももっと楽しいだろうに。

隣りに並ぶ父と母の様に、周りの者に気遣いながら、時折そつと互いを思いやり、微笑み合えたら…

取り囲むざわめきの中、切なさに胸を痛める蓮。

…もし

…僕が今、念を送れば、摩南も返してくれるだろうか？

顔を会わせなくても、僕の想いに答えてくれるだけでも良い。

一月後と、約束を交わしておきながら、もう自分が耐えられないなんてな。

「…蓮様…

どうなさいました？」

名前を呼ばれ、ハッとすると、長老頭が蓮の顔を覗き込んでいた。

「ああ、すまない。

少し酒が回ったかな。」

さり気なく、取り繕う言葉を言う蓮。

すかさず韻が、

「少し外に出られた方が良いのでは？」と、助け船を出す。

長老頭は、横目でちらりと韻を睨み、少し慌てて言葉を続けた。

「では、我が一族の者の挨拶だけでもお聞き下さい。

皆様の御側仕えとなる者もおりますので。」

鎮耶は落ち着いた声で、長老頭の焦りを宥める言葉を掛けた。

「館に上がったからでも良いだろう？」

全く見知らぬ顔の者ではないのだからな。」

「そうね…その方が、互いに打ち解けて、話もしやすいと思うわ。

改めて場を設けるから、楽しみにしててちょうだい。」

朱璃は皆に向け、艶かな笑みを浮かべる。

長夫婦の意見は、長老頭を充分に満足させるものだった。

普通ならば、側仕えの者に場を設けて御対面など無い。

せいぜい、主の暇な時間に挨拶を述べる程度だ。

彼は、長夫婦の気遣いにゆっくりと頭を下げる。

慌ただしこの場でよりも、一族の者の姿、人柄をも蓮に判って貰える絶好の機会なのだ。

次代の長の心に止まるには、自然に打ち解けた方が良い：

器量も心根も、申し分ない娘達なのだからと、長老頭は言葉に出さず思っていた。

「有り難いお言葉です。それでは、私共の挨拶は是にて…」

その言葉と同時に、丁重に頭を下げる風龍の一族。

面を上げた韻に向かい、蓮は声を掛けた。

「韻。花園で酒を覚ますのに、付き合ってくれないか？

父上、母上、少し席を外しても良いですか？」

ちゃんと戻って来ますよ、と言いながら、蓮は腰を上げる。

「見事な花園を散策させて頂けば、すぐに酔いも覚めるでしょう。」

韻は蓮の傍らに寄り、長夫婦に微笑んだ。



夕暮れ時の、柔らかな陽射しに包まれた、春の花満開の花園。

遠目に見える館の周りは薄く闇に包まれ、宴の明かりが煌めいている。

「はあっ、俺が余興をする事もなく、場が凌げて良かったな。お二方に感謝せねば。」

大きく息を吐き、手足を伸ばす韻。

「気を使わせたな…」

「まあ、返って良い話になって、父も、うちの一族も喜んでいるがな。」

「韻がそう言ってくれど安心だ。」

舞い散る花吹雪。

摩南も、あの公園の桜を眺めているだろうか？

柔らかな桜色が舞う、二人の再会の場所。

「蓮：俺は、しばらく花でも眺めておく。」

一人で酔いを覚ましてこい。」

韻は、軽く蓮の肩を叩いた。

韻には、隠し事は出来ないか。

「僕は、そんなに上の空に見えてたのか？」

蓮は、くすりと笑い韻に尋ねる。

韻は、蓮の肩を押し、

「気付いたのは、俺と鎮耶様と朱璃様ぐらいだろうか。ほら、余り時間も無いんだ。」と言い、蓮を促した。

「判った。」

韻の優しさに甘えよう。

宴に帰る時には、念を送ってくれ。」

蓮は、花びら舞い散る花園の中に、ゆっくりと足を進めていった。

韻は後ろ姿を眺めながら、

「お前が、あんな顔を見せるとはね…

初めて、魂の半身の話をした時と同じ位、切なげだったぞ…」と、ぽつりと呟いた。

俺も幼い頃から、言い伝えは知っていた。

だが、蓮本人がその話を初めて語ってくれた時の表情は、本当に悲哀に満ちていた。

まだ、成人したばかりの俺達の歳には似合わない、切なげな笑み。

俺は、気に入った娘に想いが届かないと嘆いても、蓮程の想いをまだ知らなかった。

あれから、蓮も幾人かの娘と共にいたが、あいつにあんな顔をさせたのは、今回が初めてだろう。

「無邪気で素直な、お前を見てみたいもんだ。」

韻は、遠のく蓮の後ろ姿に呟いていた。

夢また夢（前書き）

間が空いて申し訳ありません

夢また夢

不思議な出来事に心を奪われた休日。

それも、もう終わろうとしている日付が変わる時間。

摩南はゆったりと風呂に入り、明日の仕事に向け気持ちを切り換えようとしていた。

汗を流した身体を冷やさぬよう、下着の上にパイル地のバスローブを羽織ったまま、居間のソファーへと、ペットボトルを片手に腰を下ろす。

「はあっ、気持ち良かったあ。」

冷えた水を口にしながら湯に火照った肌に目を向けた。

灰かに紅く染まる肌の上に、くっきりと刻まれた紅い華が浮かび上がっている。

それは、蓮との一夜が夢でも、昔の出来事でも無く、つい昨日の事だったのだと、摩南にまざまざと思い起こさせる。

今日一日で何度も蓮を思い出し、その度に指輪の碧色の煌めきに目を移した。

：こうして思い出してるだけでも、気持ちが伝わるのかな？

ねえ…蓮…

蓮も、私の事思い出してる？

指輪を両手で握ったまま柔らかなソファ―に身体を横たえる。

間接照明の柔らかな光に指輪を翳し、乳白色の中の碧の星をしみじみと眺める摩南。

「仕事中も、指輪ばかり気になっちゃうかも…」

ふうと溜め息を漏らしながらも、彼女の顔には微笑みが浮かんでいく。

昨日、蓮と居た空間とはまるで違う…

これが、私の日常。

死んだおばあちゃんは、龍神様を感じるんだって言ってた。

「その血が関係してるのかな？」

でも、お母さんからは、全く聞いた事ないし。」

そんな思いを口に出しながら、指輪を眺める摩南の視界がぐらりと揺れた

「…ん…何だろ？…

もう、眠くなっちゃったのかな…」

不思議に思いながらも、徐々に意識が吸い込まれそうになってゆく。目を開けるのも億劫になり、部屋のライトが重なり合って見え始めた。

翳した手が脱力し、ぱたりとソファ―に落ちた。

「…ん…」

瞑った瞼に残る照明の光が薄れ、ゆつくりと闇に包まれてゆく。

しばらく意識を失い目覚めたかと思えば、そこはまだ闇の中。

摩南の視界には、何も写ってはいない。

ふわりと宙に漂う感触がだけ、身体に伝えられている。

…連に、結界に連れて行かれた時みたい…

でも、昨日と違って意識が有る…

夢見てるのかな？…

無重力の空間の如く、上下も無く、ゆらゆらと宙に浮く摩南の身体。

「……………」

闇の彼方から、微かに女の声が響いて来た。

啜り泣きながら、誰かの名を呼んでいる様な弱々しいその声に何故か摩南は胸が痛くなる。

少しづつ摩南の身体は、闇の一点に向かい浮遊し始めた。

気付けば、裾引きの着物を纏う女が、暗闇の中央に写し出されている。

仄かに白く輝き、ぼんやりと霞むその姿は、長く豊かな髪に顔が隠

されている。

途切れ途切れで、誰を呼んでるのか判らないが、悲哀を帯びたその声は、摩南の頭の中に直接響き渡る。

「ねえ………何故泣いてるの?…」

問い掛けた摩南の声は、彼女の耳には届かないらしい。

『私の浅はかな想いが、あの方の魂を見失わせたのか?…
こんなに名を呼べど、未だ闇が明ける事は無い』

切ない想いを溢れさせた言葉が、摩南の心までも揺り動かす。

…何で、こんなにも胸が痛むんだろう。

聞いている私までもが、涙を零しそうになる…

いつの間にか、摩南の身体は彼女へと近寄り、俯した傍らに立っていた。

小さく震える肩。

投げ出された華奢な手はぎゅっときつく握られている。

『共に生を終えたあの時の、私の心の揺らぎが、この結果を招いたの?』

我知らず、摩南の頬には涙が伝い落ちていた。

…そんなに泣かないで…

ぽろぽろと流れる涙の雫は、頬から落ちると水晶の様に輝きながら、宙に浮かんでゆく。

その粒は、雨粒の如く闇に拡散していた。

『誰だろう？』

こんなにも温かな雫を、この闇に降らせるのは…

…久方振りだ…

この闇では、私から姿は見えぬが…そなたも愛しい者を思つて此所に迷い込んだのだろう。』

声が落ち着きを取り戻すと共に彼女は摩南に対し一方的に語りかけた。

「私の姿は…貴女には見えないんだね。

迷い込むって…此所から…どうすれば抜け出せるの？」

聞こえぬと判つても、摩南は彼女に話し掛けるしか、術が無かった。

自分から零れ落ちた涙の粒を纏う髪に、そつと手を掛け、優しく撫でる。

その瞬間、

『こ…の気は…龍…？』

何故、人界近くの闇に…この気が紛れているの…？

誰か呼んでいる…

昔のあの方と私の様に、心で互いを欲している』

と言い、握った拳を弛めた。

「貴女は、龍の気が判るんだね…」

摩南の口元に、静かな微笑みが浮かぶ。

「ねえ、龍の気が判る貴女は誰？」

おばあちゃんみたいに、龍神を感じる事が出来る人なの？」

もしかして、私と血が繋がる人なのかもしれないね…

摩南の頭には、すんなりとそんな考えが浮かび上がった。

摩南は、連日の反日常の世界に余り戸惑いを感じない自分に少し驚きを覚える。

「貴女の言葉嬉しいな。」

蓮も…私の事想ってくれてるって事だもの。」

摩南は、彼女の髪を撫でる手に嵌まった指輪に目を落とす。

碧色の煌めき。

蓮の想い。

『早く…この闇を抜けて愛しい者の元へ行け。

呼ぶ声が届く内に…』

面を伏せたまま、彼女はそう呟いた。

「抜けるって言っても一体どうすれば…あっ…」

指輪の煌めきが、ずっと針の様に上に伸びてゆく。
細い一筋の碧色の光が、闇の中果てる事無く、真っ直ぐに天を目掛けている。

…もしかして、この光を辿れば此所から抜け出せるのかもしれない。

「貴女は…まだ此所にいるの？」

碧の糸に導かれる様に、摩南の身体がゆっくりと浮かんでゆく。

『ああ！これは…

懐かしい龍の次元…

私も連れて行って！

あの方の

…魂が眠るあの世界へ！』

よろよろと立上がり、追い縋る彼女の細い指先が宙を掴む。

摩南は片手で女の姿を掴もうとするが、身体を突き抜け触れる事すら叶わない。

『まだ、時は訪れてないのか！？…』

悲哀に満ちた心の叫び。

彼女は、立ち尽くし宙を見上げ再び涙を零していた。

「早く…その人と出会えるのを祈ってるから！」

涙の雫を宝石の様に闇に散らしながら、闇を翔ける摩南。

彼女の白い光を纏う姿は摩南の足元で、朧気に霞んでゆく。

そして、摩南の頭の中に響いた声も、誰かの名を呼びながら徐々に薄れていった。

「何だか、あの結界の外にあった闇みたい…」

光に導かれなければ、又しても上も下かも判らぬ闇。

その闇は、幾重にも折り重なる雲の様にねっとり、摩南の身体に纏わりつく。

…蓮は意識を持ったまま結界を抜けるのは、私の身体に負担が掛かるからって言ってたよね。

…じゃあ、これはやっぱり夢？

光が摩南を引き寄せる速度は、段々と増している

「きゃあっ！」

何かの力にぐいっと引っ張られ、摩南の身体はすざましい速度で上昇し始める。

彼女は、吹き付ける強風に固く目を瞑った。

目を閉じたまま強風に晒されながらも、浮遊する身体には、爽快感さえ感じられる。

…蒼空を翔けるって、こんな感じなのかな。

纏わりつく闇が離れゆくと共に、瞑った瞼に光を感じる。

瞼越しにも判る程の光に身を包まれたと思った瞬間、ぐぐつと何かを突き抜けた感触を感じた。

風も止み、はっと目を開ければ夕暮れ時の空。

摩南は、華爛漫の風景の中にふわりと浮遊していた。

「これは…花園？」

春に花を開かせる、様々な種類の樹々。

その間から広がる野原にも、所狭しと春の花々が咲いている。

かと言って、無秩序に咲き乱れている訳でも無く絶妙に手を加えられた、見映えのする風景だった

ちょっとした道の隅にも蓮華草達が春の色を添えている。

「すごい…

少しづつ時期がずれてる花も有るのに、こんなに一斉に咲き乱れてる…」

花びら舞う木立ちの間に浮かんだまま、摩南は感動の余り溜め息を漏らした。

「でも…さっきの闇の中とは、全然違う場所だね。

あの女の人…龍の気を感じるって言ってた…

じゃあ、此所は龍の結界の中なのかな？」

私は、蓮と過ごした結界の中しか知らない。

もしかしたら、此所があ部の部屋の外の世界なのかもしれない。

そんな思いを抱え、ふと木立ちの奥に目を移せば遠目に同じ様に広がる野原の先に、ぼんやりと家の明りらしき物が見える

摩南の頭上に広がる夕暮れ色の空とは違い、薄闇に包まれ煌めく明り。

そちらからは、微かに人のざわめきが感じられた

「どうしよう。

さっきみたいに私の姿が見えないなら、あそこまで行ってみたいけど…」

蓮と出会った事で、夢では無い世界が有ると知り、摩南は少しためらっていた。

蓮の結界内とは違い、今の自分は、周りの物に触れる事が出来ない。

だが、突然その状態が変化するかもしれないとなれば、躊躇するの当たり前だろう。

摩南は好奇心と戸惑いを抱え、樹々に身を隠しながらも、恐る恐る先へと進み始めた。

時折、木立ちに響く鳥の鳴き声が、摩南の心を癒してくれる。

揺れ立つ陽炎の様な姿はまるで自分の方が、人ならぬ身なのでは無いかと摩南に感じさせた。

「何にも触れないのも、寂しいよね…」

目前に咲く花々を眺め、摩南は物憂げに呟いた。

はらはらと舞い散る花吹雪も、摩南の身体を通り抜け、地面に重な
ってゆく。

もしも、蓮が自分との再会を選ばなかったとしてたまにはこんな風
に姿を消し、人界に尋ねてくれたりするだろうか？

摩南の心に、ふとそんな思いが浮かんた。

再会したと言えど、実際出会って想いに目覚めたのは昨日の事なの
に、悟り切った考えが何処かに漂っている。

…自分でも不思議な位…

それは、きっと蓮が側に居ないから…

あの女の人が言っていた言葉が頭に響いて残ってる。

『声が届く内に…』

素直に本音を言えば、再び彼に逢いたい。

摩南は自分の指を持ち上げ、そっと指輪に唇を落とした。

「此所が、どんな世界か判らないけど…
もしも、逢えるなら、蓮に逢いたいよ。」

二人だけで過ごした、あの闇も愛しい。
だけど、こんな風景の中で共に過ごせたなら、もっと素敵だろうっ
て思うから。

「欲張りかもしれないけど、約束破っても良いかな？」

それに、蓮と会えたなら帰る方法も教えて貰えるかもしれないしね。

」

：これは、私の魂が身体から離れているのかもしれない。

蓮と結界に籠った影響が残っているのなら、何か手掛かりが有る筈だもの

碧色の煌めくが浮かぶ石を見つめ、摩南は願った

「…蓮…

お願い気付いて…」

そっと呟き、摩南は柔らかな唇を石に押し当てる

しばらく石に変化も無いままだったが、摩南は徐々に指輪に熱が集まるのを感じる。

それは、不安になり始めた彼女の心を落ち着かせるかの様に、じわりと温度を上げている。

「良かったあ。」

顔を綻ばせる摩南を誘う様に、追い風が吹き上げ花吹雪のトンネルを作っている。

摩南を、木立ちの奥へと導く風と花びら。

「周りの様子に気をつけて、進むしかない…か」

摩南は覚悟を決め、その中に足を進めた。

花と風の誘い

暮れる空を眺め、花開く風景に目を遊ばせながら蓮は花園の木立ちを散策していた。

賑やかな宴の声は遠くに響いていたが、離れて聞いている今の方が趣を感じさせる。

「堅苦しくない宴と言えど、好き勝手には出来ないからな。
むしろ、別の日に韻や内輪の気心知れた者で、此処でゆっくりと場を設けて貰おうか。」

蓮は、そんな言葉を呟きながらふうと息を吐く。

眠りから目覚め、毎年慣れ親しんだ花園の光景に彼の心は癒される。
鎮耶と朱璃が、慈しみ丹精込めた花々は、息子への深い愛の象徴でも有る

ゆったりとした様子で、ぶらりと歩いている蓮が何かに反応し、急に立ち止まった。

「誰だ？」

韻なら、もっとはっきりと念を送ってくる筈：
それに、この気は…？」

自分の込めた念に重なり届くのは、摩南の気だ。

：だが、何でこんなにも近い場所を感じられるんだろう？
それに…微かに同族の気が混じる。

まさか、龍と共に居ると言うのか？

「……どちらでも良い！」

とにかく、摩南の気を見つけるのが先決だ！」

宙に翳した手が、白く発光し摩南の指輪に反応する。

「この奥…か…」

蓮は摩南への返事の代わりに自分の気を指輪に送りながら、花びらの舞う中を跳び去った。？

身体の重さを感じさせぬ軽やかな足取り。

深い紫の着物の袖と、袴の裾をなびかせ宙を翔け木立ちを抜ける蓮。

「この風は…？」

風に花びらが舞い上がり道を作っている。

僅かに向かい風に抵抗を感じるが、怪しげな様子も無い。

蓮は夢中で花吹雪を駆け抜ける。

不思議に思う要素は、幾らでも有る。

だが、それよりも身近に感じる摩南の気配に、彼の心は奪われていた。

「摩南…摩南！」

突然、強い風が蓮の身体を押し上げる様に吹き抜けた。

「くうっ、な、何だ？」

花びらと木の葉に顔を伏せ、強風に足を止める。
ぱたりと風の気配が止みそつと面を上げると：

はらはらと舞う桜と春の花々に囲まれ、宙に漂う愛しき者の姿に目を奪われる蓮。

蓮は、一瞬言葉も忘れ、摩南の姿を眺めていた。

ホッとした摩南は、極上の笑みを浮かべ、蓮の側へと近付いた。

彼女は試す様に指先を伸ばすがそれは蓮の身体を擦り抜けてしまう。

「これは…

摩南の魂だけが抜けてしまったのか？」

蓮が驚いた表情で、彼女の顔を見つめると、彼女も戸惑いながら小さく頷く。

そうだとすると、摩南の気は乱れてはいない。

：僕が取り乱してどうする。

「もう、大丈夫だよ。

どうしてこうなったか理由は判らないけど、これなら僕が元に戻せる。

安心して良いから。」

摩南は、蓮の言葉に安堵した。

「魂だけでも、多少の対話は出来る。

指輪に、念を込めるのと同じだよ。

気持ちを集中させてごらん…」

蓮は、陽炎の様に揺れる彼女の姿をじっと見守る

指輪を両手で握り締めて目を閉じる摩南。

『蓮に逢えて…良かった

怖く…は…無かったけど…少し心細かった…の』

頭の中に響く摩南の声に蓮の顔が思わず綻ぶ。

「当たり前だよ。

魂が身体を離れる事は有っても、次元を超える事はそう有る訳じゃない…

指輪の念が、摩南を此処に呼んでしまったのかもしれないな。」

『約束…破っちゃったね

でもね…蓮ならどう…すれば良いか教えてくれる…と思って』

摩南は、少しだけ顔を曇らせて答えた。

「僕は…摩南に逢いたかったから嬉しい。

それに、指輪の影響なら僕に責任が有るだろう？

でも…摩南に触れる事が出来ないのが残念だな」

彼女を掻き抱くかの様に蓮は自分の腕を広げた。そして、摩南も蓮の身体に腕を回す。感触は無いけれど、互いの体温が伝わるかの如くほんのりと温かな温もりを感じる二人だった。

「摩南：この花園以外の何処か違う次元に呼ばれたのかい？
微かにだが、僕が知らない龍の気が残っている」

腕の中にいる摩南の身体に手を翳すと、自分の臣下達とは僅かに違う龍の気配。

かと言って、他の土地に結界を持つ一族の物とも違っていた。

例えるならば：これは、自分の気に近いのだ。

：そうだ、単一の精を操る者では無く、自然の精全てを、自ら操る者だけに有る気の片鱗と、我々一族の発する気。

霞の如く、摩南の身体に纏わり残っている。

『見知らぬ：女の：人が居る場所だったの。』

誰か：の名前を：呼びながら：泣い：てた。

私の姿：は見えないみたいだったけど：その人も：龍の気配がする
って』

もしや：番いの片割れの魂か？

人界に迷い出たまま、何らかの理由で、異なる次元に捕らえられて
いるのかもしれない：

：有り得るな：

蓮は、目の前にいる摩南の顔を見つめたまま、不思議な想いに捕ら
われる

何故、彼女だけがこんなにも僕との接点を持っているのかと。

それなのに、何故、この何年も引き寄せられはしなかったのだろう

と。

「その人の話を、詳しく教えて貰えるかい？

勿論、今じゃない。

摩南が人界に戻って、落ち着いてからで良い。」

『蓮の：知ってる人？』

「まだ：判らないけどね

この、残ってる気が気になるんだ。」

『良いよ…』

快く返事をしながらも、摩南は何処かで確信していた。

蓮の一族が探している龍の魂が関係してる事を。

それは、ほんの少しだけ摩南の心の痛みともなった。

もしも、あの女性が蓮の魂の半身だとしたら、蓮の想いはどう変化するのか？

自分達が、互いに魅かれ合う気持ちは確かだが、蓮自身がずっと探し求めていたと言う魂に出会ったのなら、一体どうなるだろうと。

僅かに陰りを見せる摩南の瞳。

「摩南：僕と出会ってから、余りにも急な出来事ばかりで、疲れただろうね…」

蓮は彼女の瞳を覗き、摩南の不安を拭い去ろうと話し掛ける。

目の前に居ながら、抱き締めてやれないのがもどかしくて堪らない。

『大丈夫：疲れた訳じゃないよ。

それに、蓮にも：判らない事なんだしね：だから：この話は：帰ってからにしよう？』

蓮の気遣いに甘え、摩南の気丈な態度が弛む。

今日の出来事は怖くは無かったが、思いの他気が張っていたらしく、摩南は蓮の身体に寄り添う事が出来たらと思った。

『ねえ、この花園は蓮の住んでいる場所なの？』

「此処はね、僕の両親の結界なんだ。

年に一度、僕を囲む春の宴の為に、整えられた花園。

折角、摩南が居るんだ。向こうに送る前に、此処を案内しようか。」

『うん：蓮が居るなら：安心。綺麗な：場所だから興味が：有ったけど：一人だとね：』

摩南の言葉に、蓮の顔が思わず綻ぶ。

陽炎の様な姿の摩南を導く様に、蓮はゆっくりと足を踏み出した。

はらはらと舞い散る花の中、寛ぎ周りを眺め、蓮の視線に優しく笑みを返す彼女。

：摩南と、此処でこんな風に過ごせるなんてな：

振り替えれば、これまでに共に過ごした女とは、ゆっくり花園を散策した覚えは無かった。

春の宴は、蓮が人界の者と精を交わした証しの日でもある。
誰も咎める者などいないが、蓮自身が相手の女達に対して何処かで
後ろめたさを感じていたのだ。

共に一夜を過ごした心を残す相手と共に、この花園を巡る喜び。
それは、蓮の気持ちをより一層、摩南へと繋ぐものとなる。

宴の合間に、自分の憂いを癒されたこの場所。

小さなせせらぎが流れ、あの小川を偲ばせるお気に入りの場所や、
木立ちの間に広がる、足元を覆い尽くす蓮華草の野原。

自ら案内した光景に、摩南が美しさに溜め息を着き、驚きと嬉しさを
目を輝かせる。

他愛ない話に言葉で戯れ合いながら、無邪気に笑う二人。

それは蓮にとって、とても新鮮でもあり、本当の意味での安らぎを
感じさせた。

『ちよつと残念…あの小川に入って…みたかったな…たまには…子供
の時…みたいに遊んでみたいね…』

摩南のそんな一言が、蓮の心を踊らせる。

だが、そんな無邪気さとはまた別に、彼女の柔肌を思い出す自分が
いる。

「それも良いな…」

でも、摩南を此処へ案内出来ただけでも十分嬉しいよ。

本当は…摩南に触れる事が出来た方が、もっと嬉しいけどね」

『…私も…』

触らずとも互いに瞳を見交わすだけで、昨日の肌の感触がすぐに甦る。

…もしも、触れ合う事が出来たなら、とうにこの腕に閉じ込め、花降る下で摩南の身体を押し開いていたかもしれない…

一夜と言いながらも、時間の流れが緩い結界内で幾度も摩南の中で精を放った蓮の身体。

摩南は、じわりと蓮の身体の温度が上がるのを感じ、頬が熱くなる。

…でも、摩南の気持ちと僕の気持ちが、もっと寄り添い固まるまで、焦らない方が良さだろう。

ほんのり頬を染める彼女に、益々愛しさが溢れる。

「僕が一方的に、摩南の話を知りたいだけだから焦らすつもりは無いよ…

顔を見れるだけでも、充分幸せなんだから。」

『じゃあ…私が勝手に…甘えても…我慢して待ってて…くれる?』

少し悪戯な色を浮かべた彼女の瞳が、微笑みながら蓮の顔を見上げた。

思わず胸の鼓動が高まる蓮は、静かに笑みを返し

「良いよ…僕は、摩南が応えてくれるまで待つ。」

先の事を戸惑うよりも、摩南と逢える時間の方が欲しい…今日会って、素直にそう想えたんだ。」

と、真っ直ぐに彼女の瞳を見つめ答えた。

『訳が判らない事ばかりで…蓮に…我が儘を言っても？
考えや…住む世界が違って…戸惑ってばかり…でも？』

摩南も彼の視線をしっかりと受け止め、気持ちを確認める様に言葉を返した。

「ああ…僕と居る事が苦痛になれば、素直に教えて欲しいけどね。
二人で、もっと一緒に過ごす事から始めてみようか？」

少しの間を置き、摩南が小さく頷いた。

『色んな事考えるよりも…今は…蓮に逢いたい気持ちちが…勝っちゃ
うみたい。仕方無いよね？』

陽炎の様な摩南の腕が伸びて、蓮の首に巻き付いた。
そして、蓮の唇に摩南の唇を重ねる様に、彼女の顔が動く。触れる
事が無い

ほんのりと温かな、摩南の発する気。

一方摩南も、包み込まれる様な不思議なこの温もりが、蓮の力なの
だろうと感じていた。

知らず知らず癒される自分の心に、改めて気付く二人。

そんな甘い時間を過ごしている途中、蓮は韻の念を感じた。

館に続く木立ちに目をやる蓮に、

『もう行くの?』

と、摩南が問い掛けた。

「……おおい、蓮! ……

そろそろ…行くぞ…!」

遠くから、韻が声を掛けてくる。

蓮は、韻に向かい、

…すぐに行くから、そこで待っていてくれ…
と、言葉を使わず念を送る。

『誰か来るの?』

「いや、大丈夫だよ。

でも、少し待ってくれないか?

摩南を送るのに、席を外すのを伝えて来るから。
僕が戻るまで、此処にいて。」

蓮は、摩南を安心させようと優しく答えた。

「…すぐに戻る!」

摩南に微笑み、一塵の風と共に、蓮の姿が消えた

ふうと溜め息を漏らしながら、

『こういう事にも、慣れなきゃね…』

と、きょんとしたままその場に佇む摩南だった

蓮でさえも、不思議に思う程、この次元に引き寄せられる自分。

一緒に過ごす事から始めればいい……

だって：側に居る事は出来ても蓮に抱かれる時が、また訪れるとは限らないんだよね：

私の身体に負担が掛かるなら、蓮は我慢するに決まってる。

「また、蓮との時が重なる方法が判れば良いのにな……」

花爛漫の中、摩南は蓮の肌の感触を身体に残し、彼の導きを待つ。

一方、蓮も彼女と同じ想いを心に抱いていた。

衝動的に摩南を抱いてしまいたいような、自分の気持ちを押さえ続ける覚悟は出来る筈だ。

だが、一族の女達と違い年に一度巡って来る宵闇の重なりを受け止める事は、摩南にとってかなりの苦痛だろう。

側に居ても触れ合うだけで、身体を繋ぎ悦びを与え合う事は出来無いのと同じ様な出会いと空間で他の女性を抱く。

「龍が人界の者を娶る事が出来るなら：僕にだって可能性は有る筈なんだ

僕の精が強過ぎて、摩南の身体に負担を与えるならば：何とかその精気を操る様になれば……」

一陣の風と乗り、木立ちの奥から韻の前に姿を現す蓮。

微かに浮かぶ口元の微笑みと、何かを決心した真摯な眼差しを見て、
韻は思わず問い掛けた。

「一体、何の覚悟をしたんだ、蓮？
さっきまでとは、全然表情が違うぞ？」

蓮は満面の笑みを浮かべ韻に微笑んだ。

「韻、話は後だ！
もう少し、時間稼ぎをしておいてくれ！」

いきなりの蓮の言葉に、韻は溜め息混じりに言った。

「ちょっと待てよ。
気が紛れたと思ったら、宴を本格的に抜け出すつもりなのか？
幾らなんでも……」

「悪い……
とにかく、誰か来たら少しの間誤魔化してくれ！
頼んだぞ……」

韻は、生き生きとした蓮の声に目を見開き驚いた
言葉を返す間も無く、蓮は再び風に乗り姿を消した。

「おい…
ちょっと待て！」

慌てて蓮の気を辿るが、韻の行動を読んで気配を消した彼を、すぐには追えなかった。

「全く…何をするつもりなんだ？」

意識を集中し辺りを探れば、僅かに蓮の気を感じる事が出来る。

「ん？変だな…」

韻は、微弱ながらに蓮以外の者の気配を読み取っていた。

自然の精を操る龍の気配の他に今にも消えそうな位な同じ気を持つ者の気配が有る。

風に揺れて消えかかる炎の如く揺らめき霞むその気配を訝しげに思
い、直ぐさま韻も後を追った

…蓮が、目眩ましに気を乱してるとは思えないが
何をするつもりか、様子を確かめてみるか…

「摩南！」

花びらを撒き散らし、ふわりと蓮の身体が、摩南の前に現れた。

「指輪に気を込めるんだ！」

『えっ…うん！判った！』

摩南は手を重ね、ぎゅっと指輪を包み込む。

そんな摩南の揺らめく姿を空気で包み込む様に、蓮の気が取り巻いた。

大きな風船を腕に抱え込む様に蓮は摩南をふわりと持ち上げる。

ざっ…ざざあっ…

風が木の葉と花びらを撒き散らし、韻の驚いた声が木立ちの中に響いた。

「蓮!! 誰を連れてる!?!」

「韻!!」

韻から見えぬように、摩南の姿を遮り、素早く宙に浮く蓮。

「お前…」

「僕が呼び寄せた訳じゃない。

そう…また、僕らは時に引き寄せられたんだ…

兎も角、彼女を送り届けるのが先だ!

済まないな! 韻!」

蓮は空間を遮断し、韻の足を止めた。

韻の目に写るのは、普段見る事無い焦りの表情を浮かべながらも、腕に抱いた女に柔らかな微笑みを送る蓮の姿。

花びらと腕に遮られ、ちらりと横顔しか見る事が出来なかったその

女の表情はとても穏やかで、蓮だけを見つめていた。

そんな二人を見て、韻は遮断された空間を突破する印を結ぶのを止めた。

「全く：あんな顔見せられてたら、邪魔する気にもならないさ。帰って来たら、じっくりと話を聞かせて貰うからな。」

思わず韻は、ふうつとため息を着いた。

「蓮があれだけ一生懸命になるなら、あれが一夜を過ごした昔馴染殿だろうなあ。」

：どうせなら、俺にも紹介してから、人界に送れば良いんだ。」

呆れた表情で独り言を呟きながら、韻は元来た道を辿ろうと振り返った。

：言い訳するのは俺なんだぞ？

それにしても、蓮が側に置いた今までの女達とはかなり違う感じがするな

「まあ、今までが優等生過ぎたんだ。

あの娘と並んだ蓮は：」

思わずくすつと笑い、韻は呟いた。

「本当に：ごく普通に喧嘩もしそうな、幸せな恋人同士にしか見えなかったよな。」

自然に蓮の笑顔を受け止める、くつきりとした大きな瞳。

ふわりと、顔と肩に掛かる柔らかな髪から覗く端正な横顔は、笑顔

によって無邪気ささえ感じさせた。

物言わず静かに佇んでいれば、かなり印象が違うだろうと思わせる。

：互いに、素顔を出し合える相手と言う訳だ。

はらはらと舞う花吹雪のトンネルをゆったりと歩きながら、韻はあの二人が共にはしゃぐ様を眺めて見たいと感じる。

そして、彼女がこれ程に龍の次元に引き寄せられる事にも、不思議の念を感じていた。

蓮の空間に邪魔され、摩南の気に触れなかった韻にしてみれば蓮が呼び寄せたと思えない

「蓮と、早目にゆっくり話しをしたほうが良いか…」

韻は、そう呟き花びらの中を引き返した。

夢路（前書き）

二章ラスト）

夢路

……暗闇の中に、ぼんやりと浮かぶ蓮と摩南。

「今回は魂だけ翔んでしまったから、意識を消さなくても良いんだ。怖くは無い…安心して」

『怖くは…無いよ…』

蓮と一緒に居るんだし…

でもね…不思議なの…

あの女の人に…会った時も…

急に蓮の居た花園に…引き寄せられた時も…怖くは無かった…何でだろうね?』

摩南の表情を見つめながら、蓮も同じ様に思っていた。

見知らぬ世界に翔ばされながらも、摩南の心に動揺は無かった

むしろ、蓮に事の成り行きを話した時にも冷静に語っていたのだ。

蓮との一夜を過ごし、知らない次元が存在していると知ったからとは言え摩南の適応力に密かに驚いていた蓮だった。

「不思議なのは摩南の方だ…突然の出来事に、自然に馴染んで受け止めてくれる。

僕には嬉しい事だけだ」

『出会ったのが…蓮だったからだよ…』

二人は瞳を見交わし微笑み合った。

「さあ、摩南を送らないとな。

僕が印を結び念を送ると一瞬光に包まれる。

目が覚めれば、魂は自分の身体に戻ってるからね

：後で指輪を使って、摩南が帰ったのを報せてくれるかい？」

『うん：必ず念を送る：

待ってて：』

こくりと頷く摩南を見て、安心する蓮。

蓮はすうつと息を吐き、しなやかな長い指先を幾つもの形に組み替え印を切る。

一瞬目を閉じ、組んだ指先を彼女に突き付け、鋭い息を吐いた。

パアッと辺り一面が眩い光に包まれ、その中から蓮の声が響き渡った。

「摩南！

もう迷いは無い！

必ず近い内に、摩南に会いに行く。

指輪を外さないで：」

摩南も、蓮の声ができる光に向かい叫んでいた。

『私も：待ってる！

蓮に会いたいの！

今は只、それだけでいいから！』

余りの眩さに目が開けられない。

それでも摩南は、蓮の声が小さくなっても叫び続けていた。

徐々に意識が霞み、蓮の声も掠れてゆく。

突然光が消え、暗闇と静寂が摩南を迎えた。

はっとして瞳を開けば、ソファーに身を委ねている自分に気付く。

まるで、転た寝でもしたかの様に、ソファーに身体を横たえていた。

時計を見れば、さほど時間も経ってはいない。

「…逢えて良かった…」

摩南は指に嵌まった指輪を顔に近付け、そっと唇を落とした。

「ちゃんと戻れたよ。

ありがとう…蓮。」

まるで、その石が蓮の唇かの様に、何度も何度も唇を重ねた。

指輪の石がほんのりと熱を伝えて来る。

「ふふっ…私の思いが、蓮に届いてるんだね。」

顔を綻ばせ、摩南はソファーから寝室へと移動した。

ベッドサイドの小さなランプを灯し、着ていたバスローブを脱ぐ。

摩南はパジャマの上だけを羽織ると、布団を捲りベッドへと潜り込

んだ。

「昼間よりも、指輪の光が煌めいて見えるのは気のせいかな？」

暗闇の中、小さな柔らかな明りで指輪を眺める彼女の顔は、この上なく幸せそうだった。

一月後の不確かな約束ではなく、必ず逢える確実な約束に変わった喜びに包まれ、彼女は飽きる事無く指輪を眺める。

指から伝わる蓮の想いを感じながら、摩南は漸くまどろみ始めた。

いつもの眠りの世界に旅立ちながら、心が充実している満足感に酔ってゆく。

目まぐるしい体験が続きながらも、必ず蓮に繋がる事柄に不思議さを感じながら、摩南はゆっくりと眠りに落ちていった。

…おやすみ…蓮…

次に逢う時には、もっともっとたくさんお互いの事話そうね。

…そう、一緒に居る事から始めれば良いんだよね
何かが有っても、二人で考えていこう？

…これからが始まり…
だから…早く側に来て…

摩南は指輪を嵌めた手に顔を寄せたまま、すうすうと寝息を立て始めた。

三章・魂呼び◇友（前書き）

お待たせしました。

三章・魂呼び◇友

……公園の木立ちから、軽やかな小鳥の囀りが響く。

摩南にとって、いつもと同じ目覚めの時。

彼女は目覚ましの音よりも早く意識が覚め、潜り込んだ布団から壁に目を向けた。

蓮と一夜を過ごした証しの、彼の真白な着物。

そして、軽く握った手には、もう証しの、帯と指輪が碧の煌めきを写している。

日常に戻った安堵も有るが、摩南の口元からは小さな溜め息が漏れる。

立て続けに蓮と会っていた為、時間の感覚が少し麻痺してしまったのか心に喪失感が残っていた。

「今から、こんな欲張りになってどうするの？
今日か明日にでも逢える筈なんだから……」

彼女は、自分に言い聞かせる様に独り呟く。

「さあ、蓮に逢えるのを楽しみに仕事頑張ろ！」

摩南は、うーんと伸びをしてベッドから起き上がり身支度を始める。

カーテンを開け、がらりとベランダの窓を開け放ち、摩南は洗面所に向かった。



「おはようございます」

小さなビルの一階。

和柄の雑貨や、アンティークの家具が品良く並ぶ店の扉を開け摩南は朝の挨拶を交わす。

「おはよう〜」

店の奥には喫茶のスペースが有り、そのキッチンの中から寝ぼけた男性の声が返って来た。

柔らかな長めの前髪が眠たげな臉にはらりと掛かかり、片手で髪を掻き揚げながら、コーヒーネルに湯を注いでいる。

「……摩南、なんだか疲れるけどすっきりした顔してる…何かあった？」

「そう言う蛭太^{ケイタ}は徹夜でもしてたの？」

摩南はバッグをカウンター下の棚に置き、欠伸をしながら摩南に問い掛ける同僚の元に近付いた。

蛍太と呼ばれた彼は、この店のオーナーの息子でも有る。

両親の経営していたアンティークショップを任され、此処は彼のデザインの商品を置くショップとカフェを兼ねた店となった

数年前に摩南と彼が出会ったのは、共通の知り合いが居るバー

互いに服飾のデザインに関わり気が合う二人はすぐに意気投合した。

その当時から、彼は和風の意匠をモチーフにしたデザインで、ネット販売に向けた作品作りに動いていた。

手軽に買える小物から、オーダーで仕上げる洋服

徐々に仕事が軌道に乗りこのビルの二階に事務所を構え、店にも商品を飾った所、かなり評判も良くショップを兼ね店を任せる話となる。

そこで、摩南に声が掛かったと言う訳だ。

「まあね。

サンプルで作ったのが評判良かったじゃない？

折角だから、同じの何枚か仕上げてしまおうかと思って、根詰めた訳。」

「言ってくれば、今日出て来てから手伝ったのに。あ、そっか。思い付いて作り始めたら調子良く集中出来たんでしょ？」

蛍太は注ぎ終えたコーヒーをマグカップに移し、摩南に手渡した。

「正解！

それに、一枚は彼の友達からも発注受けたから、気合い入っちゃっ

た！」

蛍太の眠たげな顔付きがぱっと晴れやかに輝く。

テーブルの椅子に腰掛けコーヒーを飲む摩南に蛍太が近寄った。

「…で？摩南の休日はどうだった？」

何も無かったなんて言わせないからね？」

少し口を尖らせ、摩南の顔を覗き込んで言う。

…やっぱり蛍太にはバレちゃうな。

くすつと笑いながら、摩南はどう話をして良いのか戸惑いを感じていた。

「あのね…すごく昔に会った子に、偶然…再会したの。

二人で居るのが楽しくて…又逢う約束して…」

考えながら言葉を綴る摩南の声を、唐突に蛍太の声が遮った。

「昨日、ずっと一緒に居たんでしょ？」

そんな襟首詰まったシャツ着て、どーせ跡でも残ってんじゃないの？」

にやりと口元に笑みを浮かべながら、彼はマグカップに口を付けた。

摩南は、凶星を刺され一瞬言葉に詰まる。

「ねえ…蛍太…は、こことは違う世界が有るって信じたりする？」

私達が生きる次元とは、全く違う世界が有るかもって…」頬をほんのり朱に染めながら、摩南は言った。

「…何？

いきなり話変えて。

まあ、御存じの通り精神世界やら神話、民俗学好きだから、絶対否定はしない。

だけど、どこまで信じるかは内容次第だよ。

だって、体験してない事なら当たり前でしょ。」

さらりと言う蛍太。

「じゃあ、自分が経験した事なら…自分で信じてても良いよね…」

訝しげに眉を寄せ、蛍太はマグカップを置いた。

「摩南！

話が全然見えてこないよ

まさか、その知り合いが怪しい話でも持ち掛けたの？」

蛍太は椅子に腰を下ろしテーブル越しに摩南をじっと見つめる。

「ま、待ってよ！

そんな事無いって！

ねえ、この指輪見て。」

摩南はテーブルの上に手を伸ばし、指輪を見える様に差し出した。

勿論、蛍太もそれが摩南のお気に入り指輪だと知っている。

出会った時から、お気に入りとして指に嵌まっていたし、一緒に働く様になってからは、日常と言える程に見慣れた物だった。

指輪が痛んだのかなどと疑問に思いながら、彼は摩南の指に目を向けた。

「あれ？この石、ムーンストーンだったよね…
こんな碧色の光が入ってたっけ？」

乳白色の中に浮かぶ碧の煌めき。

蛭太は、顔を寄せじっと石の中心を見つめる。

「不思議としか言いようの無い、体験をしたのは確か…。

指輪に彼が念を込めたら、この碧の光が浮かび上がったの。

あのねえ、蛭太…

お願いだから、その胡散臭そうな目付き…止めてくれない？」

少し目を細め、摩南の指を持ち上げながら、眼差しは石に釘付けになっていたが、彼の口元からは溜め息が漏れていた。

「この石に変化が有ったのは十分判った！

この世に、そういう力が存在してるのは否定しないよ。
僕が勘が鋭い方だったのは、摩南も知ってるでしょ？

でもねえ、休み明け、いきなり念とか聞かされてもねえ……？」

蛭太が摩南の話をつしげに思うには、それなりに理由が有る。

彼自身、幼い頃から人には見えぬ者、ちょっとした事を予見する力を備えていた。

そして、両親の店に出入りする者の中には、同じ様に何かを感知する人達もいたのだ。

だが、その大人の中には微かな気配にしか気付いて無いにも関わらず、口先三寸で人を騙し、高額な商品売り付けている者もいる。

無論、そんな輩は自然とこの店からは離れていったが、風の噂で良からぬ話は流れて来るのだ。

幼少から、そんな話を見聞きしてきた彼。

摩南の指輪の石から、高貴で澄んだ波動を感じてはいたが、その相手が念を込めたと言うのに少しばかり心配をしていた。

蛭太は持ち前の勘の鋭さで、摩南が自然と周囲に邪な気を寄せ付けないのを感じ取っていた。

だが、本人は全くそんな事に気付く気配も無く、自然体のまま過ごしている。

だからこそ、そんな摩南の側に居るのは蛍太にとって居心地良く、癒される場所でもあった。

「あのね…指輪に込められた念は悪い物じゃないよ。」

只、まだ何も知らない相手だって言うのが心配なだけ…」

「うん…蛍太の言う事はすごく判るよ。」

私だって反対の立場なら同じ事言うもの。」

摩南は視線をマグカップに落としたまま、ぽつりと呟いた。

少しの沈黙の後、蛍太はテーブルに顔を付け、彼女に優しく問い掛ける。

「夢物語だと思って聞いてくからさ…だから、どんな夢見たのか教えてよ?」

そんな蛍太の言葉に視線を上げ、二人は柔らかな微笑みを交わし合った。

ぽつりぽつりと、摩南は宵闇で蓮と出会った事から、少しずつ出来事を語り始める。

そして、夢路から魂が身体に戻った話を話し終えると、そっと蛍太の表情を窺った。

摩南の顔を見ながら、彼の表情はひどく真面目なものへ変化している。

そして、彼の口から零れた言葉。

「龍神の念が籠った指輪ね…」

ふーん、澄んだ気を残してる理由が判った気がする…かも。」

「ねえ…」

信じてくれる？」

蛍太に向かい、怖々と摩南が問う。

テーブルの上で首を傾げながら、「さっきよりは、まだ安心出来た。」と彼は言った。

がしがしと、柔らかな前髪を手で掻き揚げる蛍太を、摩南は静かに見つめている。

「さすがに、僕にはそこまでの体験は無いし…」

そうだ！お祖母さんが龍の気を感じる巫女さんみたいな人なら、何か話聞いてないの？」

「詳しくはね。」

感じるだけで、龍神様と会ったなんて聞いた事無かったし…」

ううと唸りながら、蛍太は摩南の指輪を指先で触った。

とろりとした乳白色の石の中心に煌めく碧。

ムーンストーンとしては有り得ない輝き。

だが、これを目にしていると、清浄さに不思議と引き寄せられる。

「兎も角：何か有れば僕に話を聞かせる事。
どんなに不思議な話でもね。

僕成りに、龍神について調べてもみるからさ。」

はあっと息を吐き、やっと摩南の表情が弛み、いつもの自然な笑みが零れた。

「良かったあ。

蛭太以外に、こんな話出来ないもん。

聞いてくれただけで、何だか気が弛んでホッとしちゃった。」

「僕が、不思議話聞いて貰った時と、同じ気持ちなんじゃないの？
これからはお互い様って事で。」

蛭太は、にこやかに笑うと、テーブルに身体を投げ出しうんと伸びをした。

摩南は壁に掛かる時計を見上げ、

「あっ、もうこんな時間！

折角早目に来たのに。

ごめんね蛍太。
のんびりしてたの邪魔しちゃって。」

「大丈夫。

店の方に居るのは、皆判ってるんだから。

それに、事務所を見たら作業してたのは一目瞭然！
誰も遅刻だなんて思わないからさ。」

蛍太は、まだ少し眠たげに欠伸をしながら言った。

そんな、彼の言葉に頷きながら席を立ち、摩南はマグカップを片付け始める。

カウンターに置かれた、コーヒーネルとサーバーもシンクに下ろす。

摩南の後片付けを眺めながら、蛍太はさっきの話を、頭の中で整理していた。

…まあ、今は摩南自身からは、変なもの感じないから良いとして…

先を見越して、心身共に弱ったりする前に、誰かに話聞いてみなきゃ。

取り越し苦労かもしれないけど、あの指輪から感じるのは本物だもの…

幾ら高貴だとしても、強い神気は普通の人には負担になる場合もあるんだしね。

「それに：夢物語だとしても、こんなに素直な摩南初めてだもんねえ：」

彼女に聞こえぬ様、こっそりと呟き、自然に口角が上がってゆく。

「可愛くって良いんじゃない？」

僕の恋愛志向が違って、本当に残念。

ま、僕らは兄弟みたいなもんだから：しばらくは見守っておきますか。」

摩南の姿を眺めながら、蛍太は小さく呟いた。



摩南は仕事の切りの良い所で、生地サンプルが散乱するテーブルに上半身を俯せ、ふうと息を吐く

「摩南！もう良いよ。」

先月頑張った分、しばらくは時間に余裕が有るんだし、もう帰ったら？」

「そうですよ。」

特に摩南さんは、色んな仕事に関わって動いてくれてるんですから。

暇な時には、ゆっくりして下さいね。」

蛍太の言葉に、傍らで部下達も頷く。

「そうだね…

しばらくは平気そうだもんね。

じゃあ、先に帰らせてもらおっかなあ。」

身体を伸ばしながら、摩南は席を立ち、デスクを片付け始める。

「あゝあ、僕、気分転換に、摩南を送りがてら散歩してくるわ。

皆も、適当に上がって構わないからね。

一応、鍵だけは閉めといて。」

口々に蛍太に返事をしながら、事務所に居るスタッフ達は摩南と挨拶を交わした。

階段を下りながら空を眺めると、漸く月が輝きだしていた。

「良い月だね。」

「うん…昔から好きだったけど、最近、益々月夜が好きになったかな…」

「お日様だけじゃなくてお月様も、僕らにすごい影響力を持つてるから…

きっと、今の摩南は、色んな不思議話を引き寄せ易い…かな。」

静かな口調で、月夜の下蛍太は語り始める。

「又、夢に迷ったら、必ず指輪に念じて、彼を呼ぶ事！

無闇に夢に引き寄せられるのは、決して良いものばかりじゃあないんだから…」

摩南が見上げた、蛍太の横顔は、真剣な表情を浮かべていた。

「うん…」

「その指輪の気と、摩南の話を信じての助言なんだからね？
今日の所は、それしか言えないかな…」

あ、それか、仕事で僕とやり合う勢いで、僕を呼んでみなよ。」

その言葉に、思わず怪訝そうな顔になる摩南。

「何…それ？」

皮肉めいた悪戯な目付きで、ちらりと彼女に視線を合わせ、蛍太は言った

「つまり、あれ程強い気持ちでいれば、夢からも覚めるって事。

摩南は自分で気付かないけど、僕らすごい気のやり取りしてるんだよ？」

「私と蛍太が？」

「そうだよ。」

自分の力を信じて、必ずどちらかを呼び続けて。それと、これ！」

蛍太が、ズボンのポケットから取り出したのは、透明な石が付いたピアスだった。

「水晶だよ。」

昔、僕が御守り代りに貰った石を加工したもの。
気休めかもしれないけど邪気を寄せない様に。」

摩南は指先でピアスを摘むと、普段は何も着けない左耳に嵌めた。

「蛍太…ありがとう。」

「成り行き次第では、全く違う態度取るかもしれないけどね。」

一応、今は味方が居るつもりで、流されないようしっかりする事！」

彼は、摩南の背中を、ぽんぽんと軽く掌で軽く叩く。

それに応え、彼女は頷きを返す。

そして、二人はゆっくりと夜空を見上げた。

そして、しばらくの間肩を並べて、静かに月を眺めていた。

打ち明け話

春の木立ちの外れ。

韻は、時間を稼ぐ為に、ゆっくりと散策を続けていた。

少し先へ進めば、庭先で酒を酌み交わす人々に姿を見つけられる距離。

何故その場所かと言えば蓮を探す者を足止めする為であった。

気になる事、蓮に聞きたい事は山程有るが、今はそれ処ではない。すぐに戻ると言った彼の言葉を信じて、この場を繋がねばと考えたからだ

「…蓮…早く来いよ。」

何だか今日は、貧乏くじばかり引いてるよなあ俺って…」

韻がぶつぶつと独り言を呟いていると、木立ちの奥から蓮の気が感じられた。

穏やかな微笑みを浮かべてはいたが、少し申し訳無さそうな表情で、ゆっくりと韻に近付いて来る

「やっと来たな。」

韻は、棘のある口調で言った。

「悪かったな。」

今日は、韻に使わせてばかりだ：

只、彼女の事は、本当に予想外の出来事だったんだ。
信じてくれよ…」

韻に謝りながらも、蓮の微笑みは崩れないままだ

「判った！

その代わり、ちゃんと説明してくれ。

あの娘が、何故この花園にこれたのかをな。」

「ああ、僕も、韻に聞いて貰った方が良いかと思えて来た。
その方が、色んな憶測も出来そうだしな。」

「まあ、その前に一旦宴に戻らないと。

早目に切り上げる為にも卒無く皆に声でも掛けてくれよ。蓮！」

「ああ、そのつもりだ。

韻を、これ以上疲れさせては悪いからな。」

蓮は、韻の肩を軽く叩き館へと足を進める。

韻は肩を並べ、蓮と共に歩き始めた。

「…お前に隠れて、よくは見えなかったが…

感じの良い娘だったな。何よりも、お前のあんな顔が見れて嬉しかった」

韻は、少し声を潜めて、蓮に笑いながら語り掛けた。

蓮は僅かに顔を綻ばせ、照れながらもはっきりと言葉を返す。

「彼女の前だと、自分が素直に出せるんだ…
側に居たい。」

互いにそう思うのなら、そこから始めるよ…」

そう言うのと、彼は満面の笑みを浮かべ、韻の瞳を真っ直ぐに見た。

迷いは吹っ切れたか…

こんな良い顔をして言われたら何も返せなくなるな。

「後でゆっくり、お前の惚気を聞かせて貰うさ」

賑やかな宴の声がどんどん近くなり、二人の姿に気付いた者達が声を上げる。

「おお、

やっと戻られた！

宴の主役が居られぬと、座が寂しい限り。」

「韻様まで姿を消しては尚更の事。

さあさあ、御席に御戻り下さいませ。」

周囲へ微笑み掛けながら雅な装いをした輪の中へ足を進める二人。

上座に坐する長達は、ゆったりと手招きをし、端麗な若者を呼んでいる。

未来の長への敬意と親しみを込めた乾杯の声が、そこ此処で上がっていた

「韻も一緒に、こちらに御座りなさいな。」

朱璃の華やかな声が響く

「風に当たったせいかな、蓮の顔が穏やかになったな……まあ昨夜から落ち着く暇も無く、この宴が始まったから仕方無いだろう。」

長の鎮耶のその言葉に、隣りの朱璃も頷いた。

蓮は自分の席に腰を下ろし、韻もその傍らに用意された席に、軽く頭を下げながら、腰を落ち着けた。

「花園を歩いたら、蓮の疲れも取れたみたいです
御心配無く。」

にこやかに笑い、韻が答える。

長老方が勧める酒の酌を受ける蓮は、その言葉を聞くと、

「久々の盛大な宴だからかな。僕の宮では、こんなに多くの者が集う事が余り無いし。」

と言い、静かに微笑み盃を飲み干した。

「蓮さえ良ければ、貴方の宮で皆も宴を楽しみたいに違い無いでしょうけど……」

「そうですね。」

蓮様が、騒がしいのが苦手なのは存じて居りますので、御無理にとは言いませんが：もう少し賑やかでも良いのでは？」

すかさず、韻の父親が顔一面に笑みを浮かべ語り掛けた。

それを受け、臣下達も口々に言葉を継いだ。

「奥様を娶られれば、宮も自然と賑やかになるに違い有りませんぞ。」

「そうですとも。」

御側仕えする者達も増えるでしょうからな。

今は、身の回りのお世話する者も最小限度。」

「先を見越して、館の仕事に慣れた娘達が居る方が良いのでは有りませんか？」

さり気ない会話だが、それは臣下達の嫁候補を、蓮の身近に置く作戦とも言えた。

側に仕える娘達は、皆、素姓も家柄も申し分無い者なのだから。

ましてや、蓮が今まで共に過ごした女達は、気心知れた者に限られていた

華やかな美貌に目を魅かれ見初めるよりは、自分が過ごす時間を共有出来る女性を選ぶのが、彼の常だったのだ。

「皆の気遣いは嬉しいがまだしばらくは、今のままで良い。」

そうだな…

もっと神気を上げ、能力を高めてからでも遅くは無いだろうから。」

真面目な表情で答える蓮

鎮耶は、そんな息子を眺め、くすりと笑みを浮かべた。

「お前も成長したと言う事だ。

去年までのお前なら、只要らぬとだけしか答えなかっただろうに…」

長老頭は、

「勿論、蓮様を焦らせるつもりなどございません。

ですが、我が息子もそうですが一族を継ぐ立場として意識して頂きたいと思ひまして、皆もつい口を挟んでしまうのですよ。」
と、韻の顔に目をやる。

「その想いは、僕も韻も重々判っているとも。
安心しておくれ。」

蓮の目配せに頷きながら

「勿論です。」と、韻は落ち着いた表情で答えた

「さあ、折角の機会だ。

久々に顔見る者達に、挨拶をして来るとしよう」

盃を置き、立ち上がり掛けた蓮に皆は驚き、声を上げた。

「これは御珍しい！

自ら上座に侍れない者はさぞ、喜ぶでしような」

「年寄りが控えていると皆も緊張するだろう。
韻と二人で行くと良い」

鎮耶の言葉に、朱璃は思わず吹き出して笑った。

「そうね、そろそろ引き連れて挨拶するより良いわね。
堅苦しい宴じゃないんだもの。」

「一通り回ったら、一度戻って来い。」

その後は、韻とゆっくり飲むなり好きにすれば良いだろうよ。
但し、一夜位は、この春の宮で過ごして帰って欲しいがな？」

蓮は、父の言葉に笑いを零し、「あちらには、明日の夜に戻るつもりですよ。」

父上こそ、飲み過ぎて、床から顔を出されぬのでは？」
と言い、隣りの母、朱璃に向かい笑い掛けた。

「大丈夫よ。
必ず、私が起こして差し上げるわ。」

朱璃の瞳は、悪戯を思い付いた少女の様にきらりと輝いた。

「そう成らぬ様、気を付けるさ心配するな。」

妻の朱璃の言葉に苦笑いを浮かべ、蓮を促す様に軽く手を振る鎮耶。

蓮の「では、行くか。」と言う言葉に、韻は一礼をし、腰を上げた。

振り返れば、様子を眺めていた者達が、声を掛けられ話を交わすのを楽しみに待っている。

それぞれの一族の主な者が集まった広い座敷を見て、韻の口から溜め息が零れ落ちた。

「ゆっくり出来るまでには、かなり掛かりそうだな。」

蓮がちらりと隣りを見れば、韻の口先が僅かに尖っていた。

「まあ、韻に彼女の事を聞いて貰う為にも、頑張って早く切り上げるよ。」

面倒だろうが、一人より二人の方が場を過ごせる筈だ。 韻、頼む。」

「了解。」

小さな声で会話を交わすと、二人は彼等を待つ人々の間に足を踏み出した



宴の部屋から、少し離れた場所に用意された蓮の部屋。

大きな窓の外には、花園が広がり、ぽっかりと丸い月が空に煌めいて、風流な景色を作り出している。

「流石に人疲れしたな…

俺でさえ、くたばってるんだ。蓮は、もっと疲れただろ？」

韻ははあつと長い息を吐き、蓮に問い掛ける。

「まあな…でも、いつもよりは大丈夫だ。
なんせ、早くお前と話がしたくて、挨拶を終わらすのに必死だった
せいだろうな。」

床に寝転び、長い手足を伸ばしていた蓮は、片肘を付き、韻に向かい顔を上げた。

韻はごろりと寝返りを打ち、俯せたまま、組んだ腕に顎を乗せ蓮の顔を見上げた。

「なあ…話聞かせてくれるんだろ？
愛しの昔馴染殿の。」

「ああ…」

疲れた蓮の表情が弛み、穏やかな顔に変わってゆく。

「僕でさえ、不思議に思う話なんだ。
水底の宮や、人界への道が繋がる宮なら未だしも、この春の宮は宙空に有って、同族の龍でさえ用も無く入り込む事は許されない。
それなのに、彼女の魂が迷い込んだ…」

「強い力を持つ者が、魂を導き寄せぬ限りは無理な話。
…本当にお前じゃあないんだな蓮…」

真摯な眼差しで、韻が問い掛けた。

僅かな沈黙。

柔らかな風に揺れる草花のざわめきが、二人を包んだ。

「…一瞬、自分でも戸惑ったよ

知らず知らずの内に、彼女を呼び寄せる程の念を込めたのかな。」

さらりと白銀の髪を掻き揚げ、蓮は月を見上げる

「だが、冷静に考えればその位で、この結界に入り込む事は出来ない筈…

しかも、話を聞くと、此処へ辿り着く前に、違う空間に引き込まれたらしいんだ。」

少し驚いたかの様に、韻の瞳が軽く瞬いた。

「その昔馴染殿は…

あぁっ、呼び辛い！

先に名前位教えろ！蓮！」

「摩南…

摩南と言う名だ。」

蓮はゆっくりと瞼を睨り彼女の姿を思い出し、名を口に出して答えた。

「取りあえず、今は摩南と呼ばせて貰うぞ。

彼女は、元々、異界に同調しやすい体質なのか？それならば、まだ話も繋がるだろう？」

「摩南の血筋には居たらしいが彼女は違う筈。

だがな…今回の話を聞くと、どうやら龍との関わりが有るかもしれないんだ。

摩南が迷い込んだ空間に…龍の次元を知る、女の姿が有ったらしい…」

「異界に近寄り過ぎて、魂が迷った人間じゃないのか？
身体が朽ちても、彷徨っている輩…」

蓮の顔をじっと見つめ、言葉を待つ韻。

「そんな輩が、懐かしい龍の次元へ戻りたいなどと言うだろうか？
その女、愛しい魂の片割れと離れた事を、暗闇で嘆いていたらしい…

その上…微かにだが、龍の気が摩南の周りに残っていたんだ」
蓮は月からゆっくりと目線を下ろし、韻の顔をじっと見つめた

戸惑いを紛らわすかの如く、再び月光に煌めく銀色の髪を、片手で掻き揚げる。

「まさか…そう決め付けるには早いんじゃないのか？

それに、魂が人界に紛れたと言えど、龍魂が迷いの闇に止どまるんなか有り得ない…

お前の魂の片割れと言われる、神気を帯びた龍魂なんだぞ！」

瞬きを忘れ、射る様な視線で蓮を見つめながら、韻は起き上がり、胡座を掻き座った。

華奢な硝子の瓶に手を伸ばし、自らの盃に酒を注ぎ、一気に飲み干す。

そんな韻の様子を眺めながら、静かに蓮は言葉を続けた。

「番いの片割れの魂、

燎駕様の魂は、僕の中で眠っている…

転生したと言えど、人格と身体は僕自身の物。

燎駕様が目覚め、僕が対話を望まなければ、気を感じる事など無い筈なんだ。

…だが…その女は、懐かしい気を感じると言ったらしい。」

「…神気の弱い龍の魂が迷ってるんだろうよ…」

「いや…気になる理由がはっきりしてるんだ。

摩南に、微かに残っていた龍の気…

あれは、我が一族の発するもの

しかも、単一の精を操る者の気じゃない。」

蓮も身体を起こすと、韻と対面する様に座り直した。。

「なあ、蓮。

今、俺達は何を語ろうと憶測にすらならない。

お前が彼女と一緒に居る事で触発されて、何かが起こるなら、積極的に様子を見た方が良いだろう

…俺も協力するし、長も口出ししないと思うぞ」

「そうだな…

それに、父上も母上も、自分の思う様にしろと言っていた：余程の事が無い限り、見守って下さる筈だ。」

蓮と韻は、互いに視線を交わし頷いた。

「ならば、韻に頼みたい事が有るんだ。

摩南の祖母の家系：あの社に連なる血筋に纏わる話を調べてくれな
いか？

微細な話：いや、噂話でも構わない。」

「俺なら、お前の宮の水脈を使っても、周りに不思議がられないかな」

普段は海の水底の宮に住む両親よりも、韻の方が、気軽に蓮の宮を訪れる機会が多かった。

河の上流、涼やかな水を迸らせ山肌に滝が流れ落ちる次代の長の住い。

韻が友としてふらりと立ち寄り蓮の帰宅を待つ事も、館の者には自然になっていたのだ。

「お前が下手に動いたり、ぼんやりしてると探りが入りそうだしな。」

にやりと口元に笑みを浮かべる韻。

「ま、誰と言うなら、俺の親父殿を筆頭にした長老方だが：」
「ああ。」

僕の宮の側仕えの者は、それ程口五月蠅くは無いが：今は、余り詳

しく動きを知られない方が良い。

一夜を過ごした相手が関わるようになったら……気にせずには居られないだろうから……」

「二人の密会の邪魔をされたくは無いだろうからなあ。

しかし……互いに気持ちを確かめ合って喜ばしい限りなのに、厄介な事で落ち着かないな、蓮。」

少しだけ苦笑いを浮かべ蓮は言った。

「確かに……」

でも、この不思議な導きが無ければ、もっと戸惑ったかもしれない。しかも、戸惑う間に流れが変わり、摩南と過ごせなくなっていたなら……

そう考えたら、これは二人の大事な接点だから」

「くくっ、愛の試練って奴だな？

ああ、茶化してる訳じゃあ無い！怒るなよ」

冷やかな眼差しの蓮に向かい慌てて韻は酒を注ごうと瓶を持ち上げた。

「ほら！もっと吞めよ！

あんな、俺は嬉しいんだ

お前が、あんな柔らかな表情で笑い掛けるのなんか、初めてみたん

だぞ？

勿論、お前は、今まで付き合った女達には優しかったさ。

でも…本当に無防備な顔は見せて無かっただろ？」蓮は杯を差し出し、韻から酒を注がれると、一気に飲み干す。

「確かに…摩南と居る時の様に無邪気に笑う事は無かったな…だが、心を許していたからこそ共に居たんだ。嘘じゃない…」

蓮は、過去の恋人を思い出しながら、はっきりと言った。

長の宴で幾度も顔を合わせ、自然と対話が増え、互いに時間を共有出来た一族の女性。

宮で側仕えをする中、細かな優しい心映えに和み、日常を共に過ごした女性。

どの女性にも、安らぎを感じ、好感と優しさを抱き側に居たのだ。

只、摩南への想いの様な激しさは無かった。

「そう、嘘じゃないさ…

でも、今となれば彼女に変わる者はいない。

お前は、龍の一族の中でも、裏表無く接してくれる相手を選んでたんだ。

そのお前が、一番素顔を見せれる相手に巡り逢って、彼女が欲しいと全身全霊で感じた…」

「そうだ：

摩南の変わりはない。

韻の言う通りだよ。」

：僕本人よりも、韻の方が僕の気持ちが良く見えてるんだろう

本音を言えば、昔、彼女達は宵闇での一夜を過ごす事を、何故嫌がらないのか疑問に思っていた。

能力を高める為、一族の誉れの為と判っていて、逃れられないと承知していても、何処か納得出来ないのではと？

僕ならば、愛した女が他の見ず知らずの男に抱かれなければならぬのは辛い。

例え、一夜の儀式に過ぎないとしても：

いや、本音ならば彼女達も、我慢してくれていたのかもしれない。

古からの習わし、そして強い血族を繁栄させる為と、心を押し殺していたかもしれない。

だが：それを、素直に言ってくれる者はいなかった。

：ああ、そうか。

僕は聞きたかったんだ。

摩南の様に、僕に抱かれながら戸惑いや不安を訴えて欲しかった。

気持ちが溢れ過ぎて止まらないと言って欲しかったんだ。

「素直に、それを言葉に出来なかった僕にも非は有るか…」

新たに酒を注ぎ、蓮は言った。

「ん？何がだ？」

足を寛がせ、韻は不思議そうに問い掛けた。

「いや…僕が素直だったら、多少は違ってたかもなと思ったんだよ。

摩南の前だと、今までと違ってつい本音を漏らしてしまうのにな。」

「だからこそ、諦め切れなかったんだ。
大変なのは、まだまだこれからだぞ？」

「勿論判ってるさ。」

月を仰ぎ見て言う蓮。

「明日の夜、一度宮に帰ってから、摩南に会いに行くよ…
結界の中なら、時間を気にせず詳しく話を聞けるだろ

僕ならば、愛した女が他の見ず知らずの男に抱かれなければならないのは辛い。

例え、一夜の儀式に過ぎないとしても：

いや、もしかしたら彼女達も、我慢してくれていたのかもしれない。

古からの習わし、そして強い血族を繁栄させる為と、心を押し殺していたかもしれない。

だが：それを、素直に言ってくれる者はいなかった。

：ああ、そうか。

僕は聞きたかったんだ。

摩南の様に、僕に抱かれながら、戸惑いや不安を訴えて欲しかった。

気持ちが溢れ過ぎて止まらないうって欲しかったんだ。

「素直に、それを言葉に出来なかった僕にも非は有るか…」

新たに酒を注ぎ、蓮は言った。

「ん？何がだ？」

足を寛がせ、韻は不思議そうに問い掛けた。

「いや：僕が素直だったら、多少は違ってたかなと思ったんだよ。」

摩南の前だと、今までと違ってつい本音を漏らしてしまうのにな。」

「だからこそ、諦め切れなかったんだ。
大変なのは、まだまだこれからだぞ？」

「勿論判ってるさ。」

月を仰ぎ見て言う蓮。

「明日の夜、一度宮に帰ってから、摩南に会いに行くよ：」

結界の中なら、時間を気にせず詳しく話を聞けるだろうし。」

「：あの結界なら、しばらくはばれないさ。」

彼女とゆっくりしろ。」

蓮はその言葉を聞き、胸が熱く高まるのを感じていた。

そして、知らず知らずの内に顔は綻び、柔らかな笑顔を浮かび上がらせる。

「良い顔しやがって！

皆に見せてやりたいぜ。」

「自分でも不思議な位、摩南を思うと癒される：

だが、くれぐれも他言無用だぞ？ 韻。」

そんな蓮の照れ笑いは、韻を心底喜ばせた。

幼い頃から、立場上年齢よりも大人びた振る舞いを身に付けていた友人の、あどけない表情。

新鮮なその姿に、韻は一層蓮の恋を、手助けしてやろうと思うのだった。

月明りに照らされた蓮の顔は、より一層輝きを増す。

黙っていれば近寄りがたい程の端麗な造りだが、無防備とも言える柔らかなその表情は、蓮を見慣れた韻でさえも、心魅かれるものだ。

しばし、蓮のその顔に見惚れながら、韻は考えていた。

…蓮は、今のままでも鎮耶様に劣らない長の素質を持ってる。

だが、人によっては、卒が無い蓮を捕らえどころの無い者と感じている筈だ。

…今の蓮を垣間見る奴がいればそんな考えなんて吹き飛ばす。韻は友人の顔を眺め、そんな事を考えていた。



『……、…何故？

宵闇の儀式は一夜だけ…

ねえ……人界へ忍びに行くのは何の為なの……
教えて……、……!!」

押さえ切れぬ感情が、女の声色に映る。

掠れて全ては聞き取れぬ言葉。

誰に向かい、話しているのだろうか？

摩南は夢の中、誰かの記憶を辿っていた。

断片ばかりで、流れも判らぬ様々な光景と女の言葉。

輪郭はぼやけ、途切れ途切れの会話は、何を意味するか教えてくれ
はしない。

そんな中、突然はつきりと浮かび上がったのは男性の顔だった

生き生きとした表情で話し掛け手を差し延べる姿。

一生懸命に、誰かを宥めているのだろう、覗き込みながら、時折困
った様に首を傾げている。

切なげな声が響き渡った光景の後で、摩南の心はほっと癒される。

『……あの方も……一族から離れ……この様に休まる場所が欲しかった

のだろうか？

私では…癒しになれなかった？

此処は…私の素顔を出せる場所でも……私が欲しているのは…貴方なの、……！！』

再び彼女の啜り泣きは、辺りに響き渡る。

あの男の顔が現れ、瞼を閉じながらゆっくりと霞んでゆく。

少し心配そうな微笑みを残し、目尻に一筋の涙が零れ落ちた。

誰なの？…この男の人は？

『……、ごめんなさい…

そして…ありがとう…』

長い髪に隠れた女の横顔。

遠くを見つめながら唇に浮かぶ優しげな微笑み。

……貴女は誰か教えて？

摩南は、心の中で再び問い掛ける。

次元に引き込まれた前回とは違い、これは正に夢の中。

無駄かもしれないと思いつつ、初めて微笑んだ彼女に問い掛けてみ

たかったのだ。

『人の命は短い……』

だからこそ……この様に心に残るのだろうか……？』

啜り泣きの姿とは違い、その横顔は儚さを残しながらも、威厳漂うものだった。

『生涯の伴侶はあの方だけ……』

なのに……この慈しみの思いは何故消えないのか……』

朧気に霞み逝く女の姿。

摩南は、夢の終わりを感じ取る

暗転する視界。

掠れ逝く女の声。

意識が吸い込まれる中、遠くで愛しい人の声が微かに聞こえた

……摩……南……

甘い声が、摩南の心を喜びで満たしてくれる。

そして、はっと気付けば、元の状態で部屋に居た。

摩南は、横たわったまま、蓮の帯に顔を埋め考えた。

「この前と違って、次元に引き寄せられなかったのは、蓮と蛍太の

お陰なのかもね。

でも…前よりも色んな光景が、頭に流れ込む様に入ってきた…なんだろう？」

奇妙とも言える夢見だが、不思議と寝覚めは良い。

むしろ、普段よりもすっきりとしている目覚めだった。

「悪い夢じゃないって事なのかな？」

ころりと寝返りを打ち、彼女は呟く。

彼女は指環を翳し、微笑み唇を寄せた。

「どうかな？蓮。」

指環からは、微かに伝わる温もり。

彼の想いを伝える温かさに、摩南の心は喜びで満たされていた。



「今日の夢を聞いた限りだと、大丈夫そうだね。」

摩南と蛭太は、仕事の帰り際にカフェで和んでいた。

「そうだね。」

確かにこの前の女の人なんだけど、ドラマや映画の予告みたいに、色んな光景が次々に写し出されてゆくんだよ。

でも、嫌な感じは全然無いし。やっぱり、何か私と関係有る人なのかな？」

蛭太は灰皿に煙草の灰を落としながら、顔を横に向け、ふうつと煙を吐き出した。

「今は断言出来ないね。」

これからも夢に見るなら、内容を覚えておいた方が良いんじゃない？」

摩南は、その言葉でふと思い出した。

「人の命は短いって言ってたけど…」

もしかして、私に関わる人じゃなくて彼の……」

「ちょっと待って。」

摩南、何でも結び付け過ぎても駄目。

特にこの手の内容はね。

仮にそうだとしても、それに囚われ過ぎるのは良くない事だよ？」

蛭太は真剣な眼差しで、摩南を見ていた。

夢の憶測と仮説に囚われ、現実を忘れる者も中には居る。

彼は、自己が造り上げた世界に迷い込むのを、警戒させていたのだ。夢の光景が何かを訴えていたとしても、受け止める側の解釈次第で、様々な話を造り上げる事が出来る。

蛭太は、自らが創造した夢に溺れ、抜け出せない者を間近に見て来た。

そして、その傍らでほくそ笑む違う世界の輩。

その輩は、自ら人界を離れたい魂に誘いを掛け、闇を彷徨わせるのだ。

無論、そんな輩ばかりでは無い
高貴な霊気、神気を持ち、異世界と繋がりを持つ様に切っ掛けを与える者もいる。

摩南に起こった話の様に。

だが、いつでも姑息に足元を掬おうと狙っているのだ。

光があれば陰が有る。

高貴で澄んだ気に溢れる者を羨み、そこには逝けぬ悲哀が嫉妬を生む。

摩南への助言に冷静さが加味されるのは、蛭太の優しさなのだ

「了解！」

蛍太の水晶と、この指環に守られてるんだから、感謝しなきゃね。

多分、私一人だったら、その内夢の話に釘付けになって、混乱する様になってかもしれないし……」

「ま、僕にしてみれば、水晶に感謝って素直に言える摩南だから心配なんだけど。」

あ、勿論信頼は嬉しいからね」

にこやかに笑う蛍太に釣られて摩南も顔を綻ばした。

「判ってるって。」

だけど、少しでも嫌な感じがする物は、身に着け無いのも知ってるでしょ？

直感を信じなさいって蛍太の言葉信じてるもん。」

互いに信頼の眼差しを交わす摩南と蛍太。

：そう、私一人だったら、蓮への気持ちも、不安定に揺れてばかりになってた筈。

蓮と数日過ごした時間は、夢じゃないと信じれるよ。

でもね、やっぱり誰にも話せずにいたら、いつか限界が来るもの。

蛍太みたいに判ってくれる人が身近に居たからこそ、蓮との一夜に

素直になれた。

…そんな気がするんだよ。

「ねえ、蛍太。

その内、田舎に一緒に行ってくれない？

あの社に行ってみたいの。

何も判らなくても良い。

只、あの場所に久しぶりに行ってみたいくて。」

彼はお気に入りのカップに口を付け、珈琲を飲み干した。

「良いよ。

あの辺は興味深い場所だったし行きたい神社仏閣も有るんだよね。」

まあ、夜遊び場所が無い分、摩南が美味しい物をご馳走してくれるでしょ？」

ね、と首を傾げる蛍太に、彼女は溜め息を漏らした。

「蛍太は食いしん坊だからなあその上、舌が肥えてるし。 …私のお財布事情を、頭に入れておいて。

ねえ、社長？」

彼はくすくすと笑いながら、

「それなりに、財布に入ってるでしょ？」

財布に見合った分しか、ご馳走にならないから安心して。

どうしても食べておかなきゃ後悔しそうな物なら、自分で出すから楽しみにしてなさい？」

と摩南に言った。

「心強いお言葉ありがと。」

「どういたしまして。」

仕事後の、いつもの和やかな一時。

懐かしさと温かさを感じさせるアンティークの家具と、気の許せる友。

そして、愛しい者を語る時間となった。

摩南は、そんな幸せを噛み締めながら、目の前の友と、窓からの風の心地良さに癒されるのを感じていた。

愛しき者を迎える為に

華美過ぎず、品格の有る調度品は、一つ一つ大層手の込んだ品。

龍の一族の細工師が、精魂込め誂えた品物が、清められ磨かれ、清冽な空間を造っている。

それらは、龍の宮に仕える者の手で更に清められ次代の長を癒やすのだ。

春の花園の結界を後にし、韻を伴い自分の宮へと戻った蓮。

ひとまず蓮の私室に落ち着くと、韻が自ら提案した。

「人界へ行く前に、身近な者に聞いてみるのはどうだ？

俺は清良^{キヨラ}の長老に、人界と関わりの有った者がいないか尋ねてみた
らと思ったんだがな。」

清良の長老。

彼は、鎮耶が治める龍の一族でも最高齢の龍。

一線からは退き、山奥の静寂な淵に身を置き、余生を過ごして居る。

言わば、一族の生き字引とも呼ばれる人物でもある。

人前に出る事を苦手としながらも、その博識を必要とされ、鎮耶の父の片腕と呼ばれていた。

以前は、僅かながら各地方の龍との縄張り争いが有った時代だったせいも有るのだろう。

男子の跡継ぎ鎮耶が生まれ、彼の成長を見守り、若い間は後ろ盾となり支えて来た。

後継者も得、長として見事に花開いた鎮也。

その後、今住まう淵へ、少数の弟子と共に移り住んだのだ。

自然を愛で、時折訪れる知識を求める者と対話をし、知恵を授ける隠者。

彼ならば、表には出ていない話も知っているのではと韻は考えたのだ。

「すぐに真相に辿り着ければ、他に動き様も有るだろうが…

只、摩南は人界の者。

もしも、僕の知らぬ異界との繋がりが有るのならば、知っておくに越した事は無い。」

「ああ。

事が判れば、取り留めの無い話かもしれないが、下手に動いて変な噂になっても厄介だろうよ。」

蓮がその言葉に頷くと、韻はゆっくりと立ち上がり、蓮の肩を軽く叩いて明るい声で言った。

「まあ、そんなに思い詰める事も無いさ。

お前の守護が有れば、悪さをしたくとも、大抵の者は彼女を呼び寄せるだけでも一苦労だ。

それよりも、その顔で彼女に話を詳しく聞かせてくれなんて言ったら、余計な心配を増やすだけだぞ？」

蓮の顔を覗き込み、

「なあ？」と、笑顔を浮かべた韻は、まるで子供を宥める様に、わしわしと白銀の髪の毛を撫で回した。

突然の韻の行動に驚き、子供扱いに腹を立てた蓮は、頭を撫でる彼の手を邪魔だと言わんばかりに押し退けた。

「何だ突然！

韻に言われなくとも、摩南の前で心配掛ける態度など見せぬ！」

「いやいや、見せるのも大切だと思うぜ？

俺が言いたいの、思い詰め過ぎず、彼女と二人でよく考えな
事だ。

俺達よりも、話が見えないのは彼女だろう？」

「韻。

もしも、この話の関わりが億劫になったら、気にせず言ってくれ。

僕にしても：今までに無い事だからな。」

蓮の迷いの無い真っ直ぐな瞳。

「俺の気が済むまで、付き合おうよ。

さ、早速、清良様に会いに行くとするか！

蓮は、彼女に会うんだろ？ 身体でも清めて、楽しい夜に備えて

おけ！」

韻はそう言い残すと、くるりと振り返り、扉へと足を踏み出した。

漆黒の髪が揺れる後ろ姿に向け、蓮は喜びを交えた明るい声を掛けた。

「感謝してるぞ！ 韻！

お前の言葉、しっかり覚えておこう。

摩南にも、良い友が居ると伝えておくからな。」

扉を閉める時に軽く手を振り、韻は部屋を後にした。

蓮は側にあつた脇息に肘を着き顎を乗せ、ほっと息を吐いた。

韻との会話で、気負う心もかなりほぐれたのだ。

人界の夜までは、まだ時間が有る。

：摩南と過ごす結界に籠る事を、皆に悟られぬ様にする為にも、部屋に籠っていない方が良いか。

そう考えた蓮は、ぱしっと指先を鳴らし、淡い碧色の光を灯した。

「そうだな……」

女官頭を呼んでくれ。」

ふわりふわりと宙を舞い、すうっと扉を擦り抜ける碧の光の珠。

急ぎの時ならば、相手に直接念を送るのだが、普段は宮では光の珠を飛ばす。

と、言えど目当ての者が居れば、直接現れるので口伝えよりも遥かに早い。

直ぐに、回廊に人の気配が近づいて来た。

「蓮様、御呼びでございますか？」

蓮は、扉の外に向かい、「ああ、中へ。」と、声を掛けた。

「昨日は、御立派な昇龍姿を拝見出来て、とても嬉しゅうございました。皆様も、大層御慶びでしたもの。」

満足そうに微笑みを浮かべ、相楽は感嘆の声を上げた。

「ありがとうございます。」

嬉しいよ、そう言って貰えるとね。

実は、お前を呼んだのは韻の一族の女官の件なんだ。」

「ああ、勿論、滞りなく準備致しますとも。

長老頭の一族の方なら尚更です！」

何時に無く浮かれた声で語る相楽の様子に、蓮は少しばかり焦りを感じ、早目に呼び出して正解だったと苦笑いを隠した。

「その事だが…余り気を使い過ぎないで欲しい。

他の皆は、場を設けて顔を合わせてはいないだろう？

韻の一族だから特別だと思いかもしれないが、普段と変わらぬ席で構わない。

側仕えをしてくれれば、自然と話す機会も増えるだろうし。」

「確かに、蓮様のおっしゃる事はご尤もですが…長夫婦御揃いでしたら、簡素過ぎるのは失礼でございます。」

ゆったりとした物言いだが、はっきりと切り返す相楽の声。

我が子同然に成長を見守り、世話を見て来た彼女には、蓮も韻も一目置いている。

「それならば、韻の父上や韻も交えの内輪の宴ではどうだ？相楽達に教えて貰いながら、宮での仕事を一族の者に見せてやれば喜ぶと思うが。」

「まあ、それはようございます。蓮様のご提案で宴と言う事ならば、皆様寛いで頂けますでしょうか。」

彼女は、御目通りの話に浮かれてはいたが、自ら話を切り出せば、蓮の腰が引けるのではないかと少々心配していた。

予想に反する、蓮の言葉に安堵する。

…私共が焦らずとも、蓮様はしっかりと先を見据えておられる。

そんな想いに浸り、相楽の顔は益々晴晴れとしていた。

「この形で良ければ、韻から長老頭に話して貰うつもりだ。
父上達には、僕から話そう。」

ゆったりとした口調で語る蓮に、相楽は手を着き頭を下げて言った。

「蓮様の、おっしゃる通りに致します。相楽、滞りなく準備を整え
させていただきます。」

「頼んだよ、相楽。
はっきり日取りが決まれば、改めて伝えよう。」

いつもの落ち着きの中に、何処となく嬉しさを滲ませている蓮。

それに気付いた彼女は、「何か、良い事でもございましたか？」
と、蓮に問い掛けた。

蓮の口元が微かに綻び、端正な顔立ちに、艶やかとも言える柔らかな
笑みが浮かんだ。

幼い頃から見慣れている、相楽でさえ見惚れてしまう美丈夫振り。

蓮の顔立ちは、どちらかと言えば以前は中性的だったが、ここ最近
は、凛々しさも漂っている。

それと相俟って、艶やかさまで伴えば、見惚れるのも当然だと相楽は思った。

「きつと、花園の見事さに癒されたせいだろう。」

「だけど、少しばかり疲れたから、ゆっくり休む事にするよ。」



相楽の退室を見送った蓮は、脇息に持たれ掛かったまま、しばし寛いでいた。

思いの他、相楽の引き際がさっぱりとしていたのは、女官の話を無下にしなかったせいなのだろう。

「皆を騙す訳ではないが、やたら構われるよりは良いな。」

父上と母上が、周りの者に余計な事は言わないのなら、顔を合わせる程度の話を受けておくのも良い手か…」

摩南との時間を邪魔されぬ為に、自由が利くに越した事は無い。

これから先、同じ様な話はどんどん増えてゆく。

「そう考えれば、父上が周りに、口五月蠅く言われなかったのは、取り巻きの者が多かったからだな。」

鎮耶の話からだ、長の伴侶としての資質を求め、様々な女性に出会う機会を拒む事は無かったらしい。

そんな中、臣下の者達は、当然の事だと長の目を信じ、口を出すのも稀だったと言う。

韻が父親から聞いた話では、『良いご縁を得ようと、見聞を広められるのは、我々には喜ばしい話。』

醜聞にならない限り、口を挟むのは無粋と言うものだ。』と、語っていたらしい。

だが、結果的には自分を良く知り、素顔をさらけ出せる朱璃以上の女人はいなかった。

若長が妹の如く慈しむ朱璃が、女性として花開き二人が番いとして愛を育む姿を、皆は温かく見守っていた。

同じ地に生まれた、珠玉の一对。

互いが想い合う様を感じた周りの者達は、余計な口出しは無用と知り、直ぐに縁談話を止めていた。

後ろ手にぼたりと扉を閉めると、蓮は指を組み替え幾つもの印を結ぶ。

身体全体から滲み出る、碧色の仄かな光。

「はっ!!」と鋭い声を伴い、霧の様に部屋中に霧散する光。

「これで良いか…」

まず、中の気配が漏れる事は無いだろう。」

蓮は、宵闇の儀式での空間を開く為に、部屋全体を封印した。

蓮の住まう宮で、主人の部屋を覗き見る様な輩はいる筈も無いのだが、万が一を考えての事だった。

年に一度の儀式に使われる空間。

普段から、龍達が使う結界とは違い、人界の気が漂う特殊な空間でも有るからだ。

蓮が、摩南との時間を封印した想い出の空間。

今宵からは、新たな想い出を重ねる空間でも有る。

蓮は封印を施した部屋の中で、再び印を結び、低く鋭い声で空間を引き裂いた。

部屋の中央に、ぽっかりと虚が開く。

闇の中に、漆黒の闇が覗いていた。

宙に手を翳し、碧の光を虚に放てば、漆黒の闇に摩南と過ごしたあの部屋が、ゆらゆらと浮かび上がった。

蓮の身体が宙に浮かび、虚を潜り抜け中へと姿を消す。

そして、彼が片手を翳すと、まるで何事も無かったかの様に、残した部屋に静寂が戻った。

「不思議だな……」

時を告げる炎の気がまだ僅かだが残っている。

あの時は、確かに消えたと思った筈なのに……」

………何故だ？

また一つ、不思議な事が起こっている。

宵闇の空間に残った炎に疑問を持ちながらも、蓮は人界へと意識を向けた。

愛しき者に会う為に………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919t/>

龍魂の破片【リュウコンノカケラ】

2011年11月17日17時34分発行